
魔王な義父と勇者なアイツ

一色彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王な義父と勇者なアイツ

【Nコード】

N3251Z

【作者名】

一色彩

【あらすじ】

魔王の義父を持つ、自称魔族の少女——フィーリア。魔王の最後の頼みにより、勇者はフィーリアを人間界に戻すと約束をしたが……？

——魔族と人間の、決して交わる事のない心。じりじりと迫るような二人の恋模様を描いた、ラブファンタジーです。少女視点になります。

それなりの短編にする予定です。

勇者と魔王。それは、多分どんな世界でも……この間柄の意味を理解しているのではないだろうか。

魔王は人間を滅ぼし、絶望を与え——勇者は人間を救い、幸せを与える。魔王は悪で、勇者は正義。それが……世界の、“理”。

——でも、あたしには理解出来ない。魔王……魔族だけじゃない、勇者だって、人間だって魔族を殺す。それなら勇者は悪で、魔王は正義にもなるはずだ。なのに——どうして？ どうして、魔族が滅ばされなければいけないの？

魔族が、人間より強い力を持っているから？ 魔族が、人間と違う見た目だから？

ねえ——本当の悪は、どっちなの？

——シャンデリアが輝く、とても広いこの部屋。王座の間とも言われるこの場所で、あたしと父上、勇者、そしてその御一行が、

睨み合いながらそこにはいた。

血だらけになって、床に倒れこんでいる父上。ボロボロになりながらも、剣の切っ先を悠然と向ける勇者。……あたしはその間に立ち、父上を庇うようにして震えていた。

「退け、フィーリア！」

父上の、今にも死にそうな掠れた声。

「退かない……！ 絶対っ……絶対嫌よ……！」

あたしは震えたまま、父上に逆らう返事を返した。……だって、ここを退いたら、父上は死んでしまうんでしょう？ 血の繋がらない、しかも人間のあたしを……本当の娘のように育てたくれた人なのに——みすみす目の前で殺させろって？

できるわけがない。……できるわけが、ないっ！

あたしは魔族。父上——魔王の娘で、それ以上でもそれ以下でもない！

「あ……あたしの名前は、フィーリア・エンジェル・マールヴオロ・オコナム力。勇者、あたしと勝負よ！絶対に父上には触れさせないわ！！」

「退くんだフィーリア！」

「っ——いくら父上の頼みでも、聞けないわ……！さあ勇者！父上を殺したくば、あたしに勝ってからにしない！！」

「……いいだろう。女だろうと、手加減は一切しない」

「っ……！止める——話を聞け、フィーリア！！」

一触即発。

それぞれがそれぞれに対して、そんな感じなのだろう。

ごめんなさい父上——でもあたしは、絶対引けないの。勇者があ

らわれ、魔王退治の旅に出かけたと情報があつたあの時から——あたしの覚悟は決まっていたんだから。あたしは父上に恩返しをしないくちなならない……ううん、恩返しをしたい。

——だからあたしは命をかけて戦うし、死んで構わないとも思っている。これもすべて、愛する父上のため——絶対やらねやしない。

あたしと勇者は、睨み合った。あたしよりも遥かに高い勇者は、こちらを見下ろすようにして……上から下まで見定めていた。対するあたしも、勇者を見上げるようにして、その風貌を観察する。

——何もかもが、父上と正反対だった。白銀の髪、髪型はショートカット、キツネのような細くて鋭い真っ青な瞳……。見れば見るほど、整っていると痛感するその顔は。あたしが惹かれる要素が——何一つとしてなかった。

あたしは父上のような、闇のように真っ暗で、艶やかな長い黒髪が好き。あたしは父上のような、血のように真っ赤で、タレ目の暖かなまなざしが好き。

——全部、全部、違う。

嫌いだ……とてつもなくこいつが、嫌い。

「っ——勇者。お前は言ったな、人間のために自分は生き、魔族を滅ぼすのだと」

「そうだ。だから俺は、倒しに来た……お前を」

「今の言葉——偽りはなかるうな。なら……我が娘は、守るべき対象に入るわけだ」

目を見開く勇者と、その一行。

「我が娘に、私の血は混ざっておらん。もちろん魔族とも」

「——人間、だと？ この人並外れた魔力を、惜しげにもせずだ漏れさせている……この娘が」

勇者が、あたしを見ながらそう言った。あたしは威嚇をするように、重たい魔力をゾロゾロと……さらに溢れさせる。

「——こやつの本当の母は、異世界人だ」

「まさか……」

「そう。異世界人は魔力を必要とせず魔法を扱う——それは漂う魔力を扱うからだ。そしてその娘は、同じように魔力は一切なかったが……育つにつれて、魔力を己に溜めていった。魔力の溢れるここ魔界で過ごしていれば、この量になるのは当然のこと」

その証拠に、我が娘の瞳は黒かろう？——父上はそう言って、顔だけ振り向いたあたしを見ては、ほほ笑んだ。

……父上は、この瞳をいつも褒めてくれたよね。あたしはルビィのように輝く、父上の真っ赤な瞳が羨ましかったけど——父上は私の瞳を、「黒曜石のように輝いてとても綺麗だ」と褒めてくれた。だから……誇りだったんだ、とても。

そして……逆に、父上との繋がりはないと証明してしまう、憎いもの。

「勇者——娘を人の世界に、戻してはもらえないだろうか」

「父上!？」

「了承してくれるならば、私は喜んで死を受け入れよう——もちろん私の命は、他の者に殺させるが。それくらいの意地は、通るだろう?」

父上が何を言っているのか、全く理解出来なかった。あたしは愕然として、ただひたすら固まる。

——人の世界? 日々のほんとして、同族同士で殺し合いをするような、馬鹿な集まりの場所へ行つて——あたしに住めというのか。……何を、考えてるの? それであたしが………幸せに過ごせるとでも?

私はか細い声で、何回も繰り返すように呟く。

「いやよ……絶対……いや……」

「——勇者、頼まれてくれるか?」

「……………約束しよう」

パニックになったあたしは、間近に立つ勇者さえも忘れ、父上にあらんかぎりの大声で言い放つ。

「っ、勝手に話を決めないで！ 言っただでしょう！？ あたしは魔族よ、父上！ 誰がこいつらみたいな愚かな人間の住む地に――！！」

その時、「フィーリイ」……と、父上があたしを愛称で呼んだ。あたしは未だに流れる涙を拭い、父上を見る。

「フィーリイ、私の愛しい娘」

「……ちち、うえ」

「よくお聞き、フィーリイ。お前の母は……異世界から来て、人間の世界で上流貴族と結婚をしたんだ。彼女と私は、言わば悪友……だか私は、彼女に心底惚れていたんだ」

母の話を聞くのは、久し振りだった。あたしは黙ったまま、耳を傾ける。

「彼女が人間と結婚したのが、憎らしかった。相手も、彼女も」

「……父上？」

「私はね、どうしても欲しかったんだ。彼女が。……だから、殺したんだよ」

殺した、そう言い放つ言葉は……とてつもなく重たく感じた。今まで聞いていた、そんな状況のそれより、一番重く、辛い。

「——しかし、殺したあとで気付いたんだ。無防備に泣く、お前の存在に」

「……」

「愛しいあの人の子供。しかし、世界一憎い男の子供でもある。……葛藤した、すごく」

「いやだ……聞きたく、ない……」

「だが私は、殺さなかった。我が娘として育てようと、誓ったのだ。……私が言いたい事が、わかるな？　フィーリイ」

あたしは、咄嗟に耳を塞いだ。

——父上の、言いたい事。それは……魔族の“掟”についてだ。魔族にとって、掟がすべてであり、すべては掟。縛られているとも言えるが——魔族全員が、それを誇りに思っている。

魔族の掟——それは、憎しみだけで人間を殺さない事。人間を殺していいのは、自分の血族、親しいものが辱められ、暴行、または命を落としてしまった場合のみなのである。

——そして、もう一つ重要な掟が、一つある。親、または兄弟が殺された場合……絶対に犯人を見つけだし、殺さねば……ならない……。

「……」

「フィーリイ……私の天使。お前は自分が魔族だと言った。ならば、やることはわかっているね？」

「で、でも……！」

「見せておくれ、お前の“魔族”としての……最後を」

……ヒドいよ、父上は。どっちみち、あたしを人間の住む世界に
……放り投げようとしてるもの。

でもね……父上？ あたし、こつも言ったのよ。

“絶対に引けないの”って——！

「嘘よ」

「……」

「父上ほど掟を尊重し、守る人を……あたしは知らない。そんな
父上が、たかが憎しみというくだらない感情だけで、人間を殺した
りするはずがないわ。だって、掟では憎しみだけで殺してはいけな
いって」

「——憎しみとは、簡単に制御できるものではない……そういう
ことだよ、フィーリイ」

「違う——違う違う、違うっ！！ 下手な嘘をつかないで……！
いったい何年、父上と一緒にいると思ってるの！？」

父上の吐く嘘くらい、あたしにだって見破れるのよ？　だってあたしは……父上の娘なんだから。

「……愛しい娘には、敵わないね」

「！　じゃあやっぱり……！」

「しかし。お前の父のほうを殺したのは、紛れもない事実だよ。

……お前の母はね、殺されたんだよ」

——お前の父親にね。

その言葉があたしの頭に浸透するまで、いったいどれだけ時間が掛かった事だろう。……あたしの本当の父が、母を、殺した？　何故？　どうして？　意味が……わからないよ。

呆然とするあたしに、父上は続けて言った。

「——彼女と俺は、紛れもなく愛し合っていた」

「！」

「だが、彼女は異世界人。人間の敵である魔王と結ばれるなど、言語道断だった」

「……そんな……こと」

「彼女に——選択の余地はなかった。苦渋の末にその上流貴族と結婚し、子供を生んだんだ。そう、お前だよ」

……ああ、頭がパンクしそうだ。

「しかし旦那は、それに気付いていた。彼もまた彼女を愛し、またかなり嫉妬深い男で——」

「それで、母さんを……殺したの？」

「……そうだ」

そして母が死んだと知った父上は、怒りに狂った。母を守れなかった苦しみや、たとえ人間と魔族でも構わないと言えなかった後悔、すべてが交ざり合って……。

気付いた時には、その手をあたしの父の血で染めていた。

「掟はたしかに守ってはいる。だから私に、間違いなどない」

「……」

「愛しい娘、私の天使。……お前はどちらの選択をとる？　フィ
ーリイお前は……魔族か、否か」

魔族か……、人間、か。もう父上は、嘘を吐いていないだろう。

——あたしが自分を、魔族だと思うなら。それは親を殺された場合、犯人を見つけたし、殺さねばならない。そう——人間でも、たとえ同族でも。つまりあたしは、父上を……“殺さなくてはならない”。

……それが、出来ないならば……。あたしは自分を——人間だと、認めなければならなくなる。

「父上……あたしは……」

「フィーリイ。愛しい愛しい、私のたった一つの宝物」

あたしは父上の、美しい血の瞳を見た。

「お前の父を殺したあと、泣きわめく小さな存在に気付いて——とても後悔した。愛しい人の大切な子の、唯一の親を殺してしまったから、強い罪悪感に苛まれたんだ。その赤ん坊は悲しみにくれ、泣いているようにみえた」

「……」

「しかし、その子は私が抱き上げた途端……ピツタリ泣きやんだ。あろうことが、笑ったんだよ」

「え……？」

「希望の光が見えた気がした」

その時の事を思い出したのか、父上の表情には、小さなものを慈しむ……暖かな安心感があった。

「お前だよ、フィーリイ」

「！」

「私は決めた。愛する彼女の子を、幸せに過ごさせてやろうと。……それが私に出来る唯一の罪滅ぼしだから。フィーリイ、私の宝物。お前は時を重ねることに、本当に彼女に似ていく……しかしその髪だけは、父のもののまま」

あたしはまた、気付いてしまった。父上が——なにを言おうとしているのかを。だから……やめて、それ以上は………言わないでよ、父上っ……！

「——聡明なお前の事だ。わかっているね？」

「……魔王の血には、膨大な魔力と力が、備わっていて……。それを飲むと、その者は………それを受け継ぐと同時に、魔王の証であ

る黒い髪になる」

「——そう。私の血を飲めば、髪は闇のように真っ黒になってしまふ。……フィーリイ、残り少ない後生の頼みだ」

父上の赤い瞳に——あたしが映る。

「お前は私の子、その証明を……私にukれないだろうか」

「で——でも、そんなことをしたら……父上は」

「ああ。死ぬだろうね」

「っ！」

フィーリイ。

父上の、弱々しい呟くような声。命がもう僅かだというのが……見て、取れた。

「愛しい愛しい、私の娘」

「……っ」

「私はお前と過ごせて……とても幸せに満ち溢れていた。本当の我が子を授かったかのようで、毎日が光り輝いていたよ。毎日をお前と過ごし、毎日を笑顔でいさせてくれた。それは私にとってかけがえのないもので、もうこれ以上の幸せは……ないとさえ思った」

「い、いや……いやだっ……父上……！」

「頼む……これからもお前が、私の子だと……思わせてくれないだろうか？ 私はお前の——フィーリアの父親だと」

——選択肢は、なかった。

ああ、父上。あたしは本当に貴方が好きでした。なによりも誇り高く……自慢の父でした。あたしは貴方以上の良い父親を、知りません……父上のおかげでとても幸せに育ちました。

あたしが魔法を使って初めて料理した時、喜びながら食べてくれましたよね？ あたしが友達と喧嘩をして、落ち込んでいた時……一日中慰めてくれました。

父上、ああ、父上。あたしも欲しいです……父上の娘だという、たしかな証明が。

「……おとうさん」

「！……フィーリィ」

「おとうさん……大好きだよ……おとうさんっ……！」

あたしは床にぺタリと座り込み、父上に抱き付いた。

「あたしはおとうさんの子……あたしは魔族よ。今までも、これからも」

「……ああ」

「私は……おとうさんの、娘だから……！」

「っ……ああ」

「う、っく……っく……！……っく、よう、なら——變じら變じら……おとうさん？」

——あたしは。

すでに、血を大量に流している父上の血を……すべて吸い上げた。
ごくろ、ごくろと、喉を鳴らしながら。

「——ああ。私の……愛しい……娘」

父上の手が、あたしの髪に触れる。その髪は——長年憧れ続けた、
父上と同じ色だった。

「……幸せに……生きて、くれ……」

そして、父上は。

——闇に溶けるようにして、父上は……その形を失っていった。

サラリと肩から流れる、あたしの髪。艶のある真つ黒な、あたし

の大好きな色。——父上の、娘だという証明。

「つう……く……！」

「……行こう、時期この魔界も……」

「う……あ……あぁっ！」

——闇夜に浮かぶ丸い月。その日、あたしは父上を殺した。
あたしは、正真正銘の魔族になれた……嬉しさで、はち切れそうだ。

でも……どうして？

「ひっく……うっっ……おとうさぁん……！」

どっぴり、じんなにくるじいの？

「つう……あ、あ……あああつ——あああああああ
あああああああああああああああああああ
！！」

あたしの名前は、フィーリア・エンジェル・マールヴオロ・オコ
ナムカ。

あたしは背負う。

フィーリア——母の付けてくれた名を。

エンジェル——父上の付けてくれた名を。

マールヴオロ——王の証を。

オコナムカ——悪魔の子だという、証明を。

あたしは一生背負い続けて、これから生きていく。——人間の、
世界で。

「——うあああああん！ とつさあああん！ わあああああん
」！

こうして、魔界の夜はふけていく。

一（後書き）

タイトルに魔王と書いてあるにも関わらず、速攻死ぬ父上（笑）
マジごめんなさい。

二（前書き）

ここから少し明るくなって来ると思います。

シリアスのがまだまだ多いでしょうが、頑張つて笑い要素も挟んでいこうと思いますので、よろしく願います。

人間界のとある宿舎。

勇者率いる四人の男女含むあたしは、同じ部屋でのんびりとくつろいでいた。……精神的には、まったく寛げてはいないけれど。

「勇者あ、ねえ、ちよこつとでいいのよ！ デートに行きましよう？」

「断る」

「んもう冷たいんだからあ！ でもそんなところが堪らないのよねえ」

「すり寄るな」

お色気ムンムンの姉ちゃんを、ペーイツ！ と投げる勇者。女は、わざとらしく「よよよ」と泣いていた。……楽しそうで、なにより

である。

——あれから、あたしは勇者御一行に連れられて、約束通り人間界へ来ていた。向かう先は、勇者の故郷でありこの世界一番の国であり、勇者御一行に魔王退治を命じた王様のいる——パリシュという国。

あたしはこの数日間、この人間どもとはまともな会話をしていない。……というか、する気になれない。向こうもその意図をくんでくれているのか、執拗には話をかけてこなくなった。

……一人を除き。

「——それでなんと！ その時勇者が颯爽と現れて、言ったのよ！ “俺は人間だ。お前らまじよくに味方する疑問はない” って！ 笑っちゃうわよねえ、“まじよく” って！ 真剣な顔して噛むんだもの、私大爆笑しちゃった」

……この、勇者が目前にいるにも関わらず、赤裸々すぎる笑いネタを話し文字通り大爆笑をする少女。勇者御一行のメンバー、勇者の幼馴染みで女剣士でもある、マリンベール・デルバルドだ。

パリシュの国の間近にある、デルバルド孤児院……彼女はそこで育ったらしい。もちろんこれはすべて、自分が勝手に話した内容。

あたしは何一つ聞いてないし、むしろ反応すら返していない。

……なのに。彼女はしつこすぎるくらい、懸命に話をかけてくる。以前「関わるな」と言ったにもかかわらず、彼女は笑うだけで変わらずこの状況にある。

溜め息がでそうだ。

「あつ、そうそう。それでね」

「……おい」

「そのあと勇者つたら、自分が間違えたくせに逆切れして」

「……おい」

「なんと風の魔法で町を全滅しかけたのよ！ 大変だったわあ」

「おいつて」

あたしは、話をまったく聞かないマリンベールに、声を掛けた。

こいつはなんなんだ、アレか？ ただの話好きなのか？ 相手が反応してくれなくても、自分が話せば良いという人種か？ ……

勘弁してくれ。

とにかくもう一度抗議を試みようと思ひ、「前にも言ったが」……と言いかけた。しかしそれは、彼女の腹いっぱいの声量により、無残にもかき消される。

「え？ わつ、珍しい！ 口を聞いてくれたわ！！ みんな！
フィーリアちゃんが喋ってくれたよ！」

そんなマリンベールの言葉に、この部屋にいる全員が振り向いた。……あたしは見せ物か？ 少し泣いてもいいか、これ。まあ人間なんかの前ではもう泣くつもりはないのだが。

しかし、これはいい機会だ。だからあたしは、全員に向かって言った。

「父上が約束させたのは、あたしに人間界へ行くようにしてほしいと言っただけだ。だからあたしは、もう別行動をとる」

「……あーらあ、随分勝手な小娘なのねえ。つまらないのは顔だけにしなさいな、お嬢ちゃん」

はぁ……出たよ、このいかにもなキャラクターの女。

——こいつは、先ほどから勇者に媚びを売っていた、お色気ムンムンの踊り子だ。たしか名前は……ジュエリー・クリアウオーターとか言ったか。

クソ生意気な人間だ、あたしの一番嫌いなタイプである。見ただけで分かる……こいつは忠誠心でここにいるわけではなく、ただ勇者が好きだから付いて来ているのだ。

……吐き気がするな。

あたしはお返しのため、虫酸の走る女を睨みながら……ニヤリと笑って言った。

「お前も、冗談は胸だけにすんな。……そこに魔力なんか詰めて、なんのギャグだ？ オバサン」

それを言った瞬間、オバサン——ジュエリー・クリアウオーターが青ざめた。多分、バレてはいないと思っていたのだろう。……馬鹿にするのも程々にしてほしいものだ、そんな明らかに魔力が見えている胸をさらけ出すなんて。魔族では、最高級の恥だぞ……そんなものは。

こいつが魔族じゃなくて、心からホツとする。

「貴女……！ “視た”のね！？」

「……視た？ それは人間の使う分析の魔法のことか？ あたしがそんなものを使わないとわからないほど、低レベルだと思ったのか……オバサン」

……たしかにあたしは人間で、魔族ではないのかもしれない。でもあたしは魔界で過ごして、日々鍛練に明け暮れた。とくに魔法に関する事は、人間の誰よりも、父上よりも知識や技術は高い。

この、ジュエリー・クリアウオーターとかいう女。ただ普通にしているだけで、所々偽装しているのが丸分かりなのだ。とくにあの哀れな胸。……哀れすぎてなにも言えない。

——その時。突如誰かがあたしとオバサンの間に、割り込む。
…勇者だ。

勇者はジュエリー・クリアウォーターを庇いながら、あたしを見て言った。

「俺の仲間を愚弄するな」

「先にあたしを愚弄したのはどっちだ」

「……魔族の、“やられたらやり返す”、か？」

「ああ。身体は人間でも、あたしは心の隅から隅まで“魔族”だからな」

クツ、と。

皮肉げに笑う。

「……だが、お前の父は人間に戻れと言った」

「違う」

「魔族であることは許されない」

「——うるさい」

「……お前は、人間だ。フィーリイ」

「あたしを……フィーリイと呼ぶな!!」

そう呼んでいいのは、父上と、仲のいい魔族だけ……！ たかが人間ごときに呼ばれるなど、許されていいことじゃない！ ……虫酸が走る、気持ち悪い。

「あたしは魔王の娘で、魔族だ！——この、魔族殺しが!!」

「……」

「あたしは一人で生きる。お前人間に世話されて、家畜同然になるならば……死んだほうがマシだっ!!」

あたしは飛び出した。追いつかれないように、姿隠しの魔法をかけて。

……ム力つく。あのすましたような表情が。人の父親を窮地に追い込んでおきながら、あの態度！ ああ、腹が立ってしょうがない！！

「フイーリアちゃんっ！ 待ってください！」

マリンベールの止めるような声すら、完全に無視して走る。……もう、放っておいてくれ。こんな地獄みたいなこと——あたしには、耐えられないんだ。

頼むからもう、一人にさせてくれ。

「なんでっ——あたしは」

走りながら、独り言を呟く。

「あたしは——！ どうしてっ……」

なんで。

なんで、魔族じゃないの……？

「っ……父上えっ……」

息が枯れるまで、あたしは永遠と走り続けるのだった。

——走り続けて、小一時間経っただろうか。人気のない森の中、
ちようどいい所に湖があったので、あたしは休憩とばかりにそこで
水を飲んでいた。

ヒリヒリして痛む喉を押さえながら、一人こちる。

「……はあ」

父上、何故あたしを、人間界に戻すと言ったの？ あたしが、耐えられるはずがないと、わかっていながら。……ヒドいよ、生きてくれ、なんて。

馴染めるはずがないとわかって、どうしてそんなことを。

「……父上……」

湖に映る、自分を垣間見る。……母から譲り受けた黒い瞳、父上から受け継いだ黒い髪。まるで本物の異世界人だ。

太陽の光を綺麗に反射するその湖を見つめながら、あたしは人知れず溜め息を吐いた。

「どうしたらいいと……言つのだろう」

あたしは魔族で、でも人間で。絶対相容れる事のない存在の間に、あたしはいる。どうやって生きればいい？

「……はあ」

ここへ来て二度目の溜め息を吐いた時、それは唐突に現れた。

——湖からひよっこり現れる、水色の小さな物体。……水の精霊か。久し振りに見たな。

「あれれ？ 貴女は魔王様の箱入り娘さん。あ、この度は魔王様にご臨終なされたとかで……お悔やみ申し上げますなの」

「……どうも」

「にしても何故人間界に？ たしかに貴女様も人間ではありませんけど、あれほどお嫌いでいらっしやったはずでは？」

「……深い事情が、あつて」

「そうですか。それはそれは大変でございますねえ。お悔やみ申上げますなの」

……、深くは言うまい。精霊とは、皆このような感じなのだから。精霊に悪意はなく、感情を左右される事は全くない。

多少抜けていると思えば、見方は可愛くなるだろう。私はそう解釈をして、折り合いをつけている。

「——ああ、そうそう。先ほど勇者一行が近くの町で、人を探しておりましたの。黒髪に黒い瞳だそうで」

「……へえ」

「どうやらまた異世界人が紛れ込んだご様子ですねえ。そう言えば姫のお母様も異世界人だとか」

「……ええ、まあ。あまり話は聞いた事ないですが」

「いやはや、今年の異世界人はどんな伝説を作ってくれるのしようねえ……楽しみです。あれ？　そう言えば姫、髪をお染めになったのですか。まるで異世界人のようです」

「……。父上の申付けで、勇者に倒される前に、私の血を吸え……と」

「はあん、なるほど。それで魔王様の力と色をお引き継ぎに」

……もう一度言おう。深くは言つまり。もちろんあたしも、ツツコミたい気持ちはわかる。が、精霊全般はこんな感じなのだ。むしろツツコミを入れたら負け。絶対夜が明ける。ナイトパレードだ。

所々抜けていて、時に驚くほどに察しがいい。読めない、と言えはわかるのだろうか……精霊は難しい性格なのだ。

「さて、私はそろそろお昼寝の時間ですね。姫も一緒に？」

「……いえ」

「そうですね、残念ですなの。それでは最後に――水の加護が姫を守りますように」

あたしは一礼をする。

これは、去り際の精霊の、決まり文句だ。意味がないわけではない……これをされたあとは、なにかと良い事はおきたりする。だから敬意を称して、お辞儀をするのが礼儀なのである。

水の精霊は、再び湖に潜り込んでいった。言っていたように、お昼寝をするためだろう。……お誘いを断った理由はこれである。

さすがに、水の中で眠る事はできませんから。永眠はできるけど。

——あたしは立ち上がった。

さあ、勇者達に見つかってしまう前に、ここから離れなくては。姿隠しをしているとはいえ、バレないとは限らない。向こうも一人ぐらい精霊と話せる奴がいるだろうし、ここに来たと話が伝わってしまう……それだけは避けなければ。

そう思って、町と反対方向へ進もうとしたあたしは……小さな異変にふと気付く。

……誰かに見られている、ということに。

「……」

あたしは立ち止まり、気配を伺った。……この気配は、まだ子供だな。男の子だが、人間……ではない、か？　もしかしたら、ハーフかもしれない。

あたしは気配のあつたほうの茂みに、視線を向ける。そして、一言。

「誰だ」

「つえ……あつ！」

——バレた事に驚いたのだろう。小さな少年は、勢いあまって躓き、顔面から地に衝突した。

……ふむ、ドジっ子属性とみた。なかなかいい位置にいるではないか。

あたしは少年の元へ行き、蹲ったまま立ち上がらない少年を立て、土などを風の魔法ではらう。つぶらな瞳を潤ませたまま、少年は驚きと喜びに顔を綻ばせた。

「すごいお姉ちゃん！ 風の魔法も使えるの？ さっき水の精霊さんと話してたから、てつきり僕と同じ属性だと思ったのに！」

「まあね。あたしに属性はないから、全部使える」

「すっごいや！ じゃあ、闇の精霊も？ 光の精霊も？」

「うん、見たよ。大精霊は、闇と光、あと火の三人だけ見た」

「うわあ…… かつこいい」

魔族と人間のハーフで……この少年は、水の属性。親は、水系の魔族だったのだろうか。

「それより、こんな所でなにを？」

「えっ……あ、僕……その。友達が……精霊さんしかいなくて」

それで遊びに来ただけで、先客がいて、精霊はお昼寝をしてしまった……と。

そういわけか。

「あの……お姉ちゃんってもしかして——？」

「あ、違う違う。あたしは異世界人じゃないよ。母が異世界人で……父上が」

魔王だった、とは言えない。あたしはしょうがなく、魔族とだけ言った。

「魔族……、お父さん、魔族なの？」

「うん」

正確には実の父ではないけれど……まあ、子供に深い話をしてもしようがないだろう。あたしは黙ったまま、瞳をキラキラさせる少年を見つめた。

なかなかのシヨタ。とても好物だ。……誤解を生みそうなので言っておくが、あたしはシヨタをとって食うような危険極まりない人種などではない。だから、視線で犯しておくことにする。

「じゃ、じゃあ……！ 僕と……同じ？ 僕も……お母さんが魔族で、お父さんが人間らしくって」

「……らしい？」

「あつ……うん。僕、孤児院育ちだから……話に聞いただけなんだ」

少年はそう言うと、モジモジ照れくさそうにして……あたしを上目遣いで見つめた。今思い出したのだが——父上にもよく言われたっけ。魔族の子供を拉致ってはいけないよ、と。

だがしかし、完ぺきな魔族じゃなく、ハーフ。その上……この子は、孤児院育ちと言ったっけ。

……いかにいかん。戻れ、戻るんだあたし。

「あ。君、名前は？ あたしはフィーリア」

そう言えば自己紹介がまだだったと思い、あたしは少しほほ笑みながら言った。ハーフだから魔力にも敏感そうなので、なるべくそれを表に出さないように気を付ける。

少年は一度「フィーリア？ フィーリアお姉ちゃんって呼ぶね！」と、可愛らしく言ったあと——これまた輝く笑顔で、自己紹介をしてくれた。

「んとな、僕の名前はガルガント！ 長いからガルって呼んでっ」

「うん。よろしく、ガル」

「よろしくフィーリアお姉ちゃんっ！」

あたしの呼び名も長いんだけど……とは言わず、いちいち可愛い事をしてくれるガルに和みながら、あたしは久々に安らぎを感じた。

……アイツらといると、気が休まらなかったんだよね。夜もなかなか眠れなかった。いつ本性を表すのか、警戒していたから。

でも今だけは……それも、必要なさそうだ。

「そういえばお姉ちゃん、どこから来たの？」

「ん？ 魔界だよ」

「魔界！？ すっごい！ 本当に！？」

「うん。魔界からこっちに来て………暮らしてみようかな、って」

本音は……まったく来たくなかったのだけど。しかし魔王亡き今、魔界はとても不安定になっている。少しつづけば消滅してしまうほどに。

しかしこんな出会いがあるならば、それもまた興か……なんて思ってしまう。こうしてこちらにだんだん慣れる事が出来るといいんだけど。そのためには、まず勇者達を振り切らないとね。

あたしはようやく逃げて来た事を思いだし、注意をして辺りを見渡した——近くに人も、いない。まだ追いつかれてはなさそうだ。

そんなあたしの急な行動に疑問を抱いたのか、ガルが、こてんつと首を傾げた。……くっそ、めちゃくちや可愛かった今の。

「？ お姉ちゃん？」

「……はっ、それどころじゃなかった」

「えっ……お姉ちゃん、急いでるの？」

「うん、実はちょっとね……勇者達から逃げてんの。ほら、アイツらって魔族が大っ嫌いだからさ……あたし殺されかけて」

「に、逃げて来たの？ 大変！ ……ど、どうしよう……隠れなきゃ——！」

「？ いや、まだそんな気配無いから大丈夫だと——」

「さつきね、その、勇者さまが他の水の精霊さんと話してるの見たんだ。だから……」

ガルの言いたい事に気付き、あたしはハッとした。そう、彼らは誰の味方でも敵でもない……なんでも正直に答えてしまうんだ！
しかも精霊同士は、以心伝心している。さつきあたしは、この湖にいる精霊と話をしてしまったから——！

やばい。

早く逃げないと、再び捕まるっ！

「やばっ——どうしよう！ どっちに逃げっ」

「お姉ちゃんこっち！ 孤児院へ行こっっ！」

「あっ、ちょ、ガル！？」

言うが早いか、ガルはあたしを引っ張って走り出した。ここは、ガルの好意に甘えよう——たしかにあたしが孤児院にいるなんて、

奴らは思わないだろうし。

私達は勇者に追い付かれませんようと祈りながら、森の中をひたすら走るのでした。

長く続く森。あたしはガルに手を引かれながら、奥へ奥へと進んで行った。

……もう、どのくらい歩いたかも記憶にない。一応魔族と人間のハーフなだけあるのか、ガルはまったく息が切れておらず、まだまだ余裕な顔で走り続けていた。あたしは……ううん、触れないでおこう。惨めになりそうだ。

「——あ、見えたよつ。フィーリアお姉ちゃんっ!」

「ごほっごほっ……あ、そう……それは……よかつ、た……!」

限界ギリギリなあたしである。

「ここまで走れば、大丈夫かな……フィーリアお姉ちゃん、歩く？」

「う、うん……歩く……けほっ」

……なんて情けないのだろう。今まさに、父親が本当に魔族であつたらよかったのにと思つた瞬間だつた。というか、魔王な父上が実の父親だつたらよかったのに。無理なのは、わかってるんだけどね。

あたしは再びブルーになりつつも、「いや、あたしはたしかに父上の娘だ」と小さく呟いた。その証拠に、ちゃんと黒髪を受け継いだではないか。これ以上、なにを望む？

「——あ、あのね、フィーリアお姉ちゃん」

「……えっ？ あ、なに？」

思いに耽り過ぎたのか、咄嗟に反応しきれなかつたあたしは、数秒遅れて返事を返した。

……なにやら、ガルまで思い詰めたような顔をしている。あたしの気持ちが移ってしまったのだろうか？ そしたらとても申し訳ない。

けれど、それは杞憂に終わった。

「えっと……」

「？」

「ほ、ほら……僕……魔族と人間とのハーフだから………あんまり孤児院のみんなと、仲良くなって、その」

「……、うん」

「だ、だから……僕のせいで嫌な思いしたら………ごめんね」

ザクリ——鈍い痛みが胸を貫いた。

こんな……、こんな、まだ幼い子供だというのに。この子はもうこの歳で、そういった感情を覚えてしまっているのか。なんて非情な世界なのだろう。

——あたしは立ち止まる。そして目線を合わせるように屈んでか

ら、しっかりと見据えて……笑顔で言った。

「嫌な思いなんてね、ドンドンさせちゃえばいいんだよ？」

「えっ……で、でも……」

「だってあたし、ガルの友達でしょ？ ……友達ってのはね、迷惑とか楽しいこととか、半分こし合うものなんだよ」

だから、と。あたしは言葉を続ける。

「あたしはガルのせいでどんな思いをしたって構わないし、全然気にしない」

「……」

「ガルもね、あたしがいれば……寂しいのや苦しいの、半分こになるから」

寂しいのや苦しいのが、半分こになる。幼い頃あたしが父上に言われた言葉だ。

母親が何故いないのかと、あたしが寂しくて泣いた時——父上が言ったんだ。「フイーリイ、愛しい娘。お前の寂しい気持ちや、悲しい気持ち……私が半分貰い受けよう。少しは楽になったかな？」と、そう言いながら……あたしと同じく、泣きそうな顔をしていた。

言われた通り、なんだか半分こにされたような気がして……楽になったのを覚えている。父上は魔王だったけど、魔法なんか使わなくてもすごい人なんだ、と思わされた日である。

あたしは、ポロポロと泣き出すガルを抱き締めながら……よしよしと何回も背中を擦った。震える身体をしっかりと抱き、何度も「大丈夫だよ」と問い掛ける。

……可愛いなあ、やっぱり。父上も、泣いてるあたしを見て……こんな風に思っただろうか？　こんな風に、撫でていたんだろうな。

——ガルを見ると、やけに昔の自分が思い出される。自分に似てるっていうの？　……でもそうすると、将来シヨタでなくロリ好きになるってことなのかな。いや、そこまで似たら最早似てるのレベルではないか。

うん。

そうならないように祈ろうか。

「さ、行こう？ 孤児院にはガルの部屋とかあるの？」

「——うん！ あ、あの……みんな一緒に嫌がるから」

「そつか。じゃあ二人でゆったりできるね」

「……！ えへへ、うん！——」

ぬうああああっ！ かーわーえーえー！ もう孤児院なんか行かずに拉致りたい。

……おつと危ない。こんなだから大臣に「犯罪者予備軍」とか言われちゃうんだ。予備軍どころかすでに実行した事ありますがね。まあそれはおいといて。

ああ、そういえば大臣も、やられちゃったんだよな。……あの、口うるさい頑固じじい——最後の最後父上を守るため、必死に道を塞いでて……殺られちゃったんだっけ。もう、あの人の小言も聞けないのか。

悲しいな。もう、どこにもあたしの仲間がいないなんて。……考えれば考えるほど、勇者への恨みがつのって——頭がおかしくなり

そつだ。ま、高貴なる魔族はそんなちつぽけな感情で行動に移したりしませんか！ ふんだ。

あたしはスクツと立ち上がり、今度はガルと手を繋ぎながらゆつたりと歩き出した。もう孤児院は見えている。

少し古臭い感じはするけれど、見た目居心地は良さそうな場所だ。……まあ、見た目は、ね。どんな孤児院の管理人が出て来るのだろう？ 入った瞬間、「あら、帰って来たの？」なんてほざきやがったら、もう孤児院ごと燃やして殺ろう。やろう、でなく、殺ろう。ここ重要。

「ただいまー」

パツと手を離して、扉を両手で開けたガル——べ、別に残念なんて思っていない。純粹にショックを受けただけです。

ちよつと小さめに呟いたガルだったが、ちゃんと聞こえたのか——中からパタパタと女の人が出て来ていた。一見大人しそうなただの人間の女だが……どうだろう？ こいつも可愛いガルを苛める輩なのか？ だとしたらもちろん、ただじゃおかないけれど。

——しかし、あたしの予想とはことごとく杞憂に終わる運命にあるらしい。ガルの言った言葉によって、それが知らされた。

「あつ、ただいまお母さん！」

「もう！　また勝手に出掛けて！　何度も危ないって言ったでしようがっ」

お……お母さん！？

あたしは仰天して、二度見ならぬ三度見をしてしまった。だって本当にビックリしたんだもの。

でもあたしは、途中で「あれ……？」と気付き始める。さっきガルの聞いた話では、たしか母親のほうが魔族だったはず。でもこの人はどう見ても……というか、魔族特有の魔力をまったく感じられない。それに聞いた感じだと両親とも、もう他界しているような印象だったのだが……。

あまり聞きやすい内容ではないため、ちょっとためらうあたし。でも聞くよりも前に、ガルが説明してくれた。

「フイーリアお姉ちゃん！ この人ね、みんなのお母さんの！」

「えっ？ みんなの？」

「あらあら、ガル、お友達を連れて来たの？ ごめんなさい、森の中大変だったでしょう。はじめまして、私はこの孤児院を切り盛りしてるキュディと申します」

「あ、いえ……ええと……はじめまして、ガルの友達の……フイーリアと言います」

……人間とまともに話す事がなかったので、あたしは少し戸惑う。ガルはハーフだったから、まだ仲間意識はあったんだけど……完全な人間とわかれると、どうもね。

若干緊張ぎみになるあたしの横で、ガルは気付かず笑顔で“お母さん”に今日あった事を伝えていた。

精霊に会いに行ったらあたしと出会った事とか、あたしが魔族と人間のハーフだとか、勇者に追われているだとか……それはもうペラペラと。ちよつと焦り始めるあたしを見てか、キュディさんは安心させるようなほほ笑みを浮かべ、言った。

「大丈夫ですよ。落ち着くまで、ここに居て構いませんから。むしろ居ていただいたほうが、ガルのためになりますわ」

この子もハーフで、ちょっと他の子供達と距離がありますから――と、キュディさんは困ったように笑った。

――ああ、なんだ、よかった。どうやらガルは、一人じゃないようだ。……あたしと違って。

本当の母親ではないようだが、それでもちゃんと頼れる大人がいる。……すごく安堵してしまうあたしは、やっぱり心配性で仲間意識が強過ぎるんだろうか？　しかしまあ、納得してしまう。大人までそういう対応だったら、普通帰りたくないもんね。うん……本当によかった。

あたしはホッとして、ガルの側へと寄る。

「キュディさんもああ言ってくれたし……ガルの部屋にしばらく泊めてもらえるかな？」

「うん！　もちろんっ」

「ありがとう、ガル」

ああ、やっぱり居心地がいいな。なんでだろう？　もしかしたら、キュディさんの暖かい心のおかげかな。人間界でなんか過ごせるはずないと思っていただけで、なんだか……ここなら大丈夫そう。な気がして来る。

でもま、しばらく置いてもらおうなら……なにか働かないとね。

あたしはさっそく、キュディさんに「なにかお手伝いできそうなことありませんか？」と聞いた。住まわせてもらえばそれ相当の働きをする、これ鉄則！

「あら、嬉しいわ。一人でやっているからとっても助かるの。そうねえ」

「えー！　フィーリアお姉ちゃん、僕のお部屋で遊ばないの？」

「ふふふ……もう、ガルったらわがままね。フィーリアさん、今日はぜひこの子と遊んであげてくださいませんか？」

「えっ、でも……」

「明日から、ちょこっただけ手伝ってください。今日はお客さんとして、ね？」

……小首を傾げながら、優しくほほ笑まれる。大人しく頷いてしまつあたり、なんだかこの人には逆らえそうにないと思った。

これが……“お母さん”、なのかな。

「わーいっ！ お姉ちゃん、行こっ」

「うん！ じゃあすいません、お邪魔します」

「ふふ、違うでしょう？ 帰って来たら、“ただいま”よ。あつ、でも今日はお客さんだったわね。明日からは、ただいま、よ？」

あたしは照れくさそうに、「はい」と頷く。すぐムズムズするけれど、それが不快感じゃないことだけはわかった。明日からは……ただいまになる、か。

魔界にある家に帰っても、そんなことを言ってくれる人はもういないから……なんだか少し、嬉しいな。でもやっぱり、照れくさいよ。

「フィーリアお姉ちゃん、早くーっ」

「はいはい。今行くって」

——でも。

この繋がりが、のちに“人間はやはり愚かだった”という風に、強く思わせる事になるなんて……。

この時のあたしは、まったく思わないのでした。

四

——草木も眠る丑三つ時。たしか異世界では、それを夜中の二時ぐらいだと言らしい。丑の刻とは午前1時から3時までの頃を言い、その2時間を4つに分けて三番目——という意味が、丑三つ時。……つまり、正確には午前2時から2時半の時間帯なんだとか。

父上が母にそう聞いたと言っていた。父上はかなり好奇心旺盛だったので、きつと昔は母に質問責めをしていたのだろう。そんな絵を思い浮かべたら、なんだかおかしくなって笑ってしまった。

……遊び疲れたのか、ガルはスヤスヤ眠っている。あたしはガルの頭を撫でながら、窓から覗く闇夜に浮かぶ月を——呆然と見つめていた。そう、草木も眠る丑三つ時に。

「……………はあ」

……夜は、一番好きな時間帯だったはず、なんだけど……。今となつては、どの時間帯も身体が重いよ。まあ、それは多分父上の

魔力を引き継いだばかりで、かなりの重量にまだ馴染めてないだけなのかもしれないけれど。

魔力は魔族以上、でも体力は魔族の平均以下。……結構落ち込む。結局は、あたしも人間なのか。

ガルから手を離し、あたしは窓際に向かう。少し冷えてきたし、窓開けたままじゃガルが風邪を引いてしまうだろう。ハーフではあってもまだ子供なんだから。

……こんな事してると、本当に“お姉ちゃん”って感じだなあ。兄弟なんているはずもないので、どう対応すればいいのかぶっちゃけわからないんだけどね。ま、愛でればいいのか。

と、その時。

「……んっ？」

窓の下——あそこはちょうど、玄関のあたりだろうか。二つの人影が蠢き中に入ったのを見て、あたしは少し警戒をした。

先ほどの影は、大人のものだ。だが——ここにはキュデイさん以外、大人はいないとガルから聞いた。ならば、今のは誰だ？……勇者、じゃないよね。

再び手に入れることのできた安らぎ——それを、またもや同じ人物に奪われるというのか？ そう思ったら震えが止まらなくて、あたしはただ息を潜めて探りを入れる。少量の魔力を、紐状にするかのように……孤児院全体に這わせた。そして、目的の人物に行き渡る。

「……？ これは……」

あたしは気付く。

これは——この魔力は、勇者じゃない。勇者一行のものでもなく、それ以前に……“人間じゃない”。これは、完全な魔族だ！

「——？ なんて……こんなところに、魔族が」

魔族と共にいるもう一人は、間違いなくキュディさんで……。いったい、どういうことだ？ と小首を傾げる。もしやキュディさんは以前、魔族を殺してしまったとか？ そしたら掟を守るため、魔

族がここへやってきていてもおかしくはない。

いやでも、キュデイさんは普通の人間な上、女性だ。とても魔族を殺せたとは思えない。でも実際魔族はここにいるのだし——やっぱり、他に理由が見つからない。

……あれ？ でもそれは、つまり……その考えが正しかったとしたら。キュデイさん………超危なくね？

「——っ!!」

あたしは一気に覚醒する。なに今までゆったり状況把握なんてしてたんだ、馬鹿ッ！ キュデイさんが死んだら、ガルだけじゃなく、この孤児院の子供達が……!!

一瞬でパニックになるあたしは、きっと父上の時並に焦ったんだろう。気配のするリビングへ行かなければと階段を降りようとして踏み外し、どこの漫才だと言わんばかりの華麗な流れで、そこを転がり落ちた。

ドスンとリビングに登場するあたし。……あたしはやはり、ヒーローにはなれなさそう。

「いっつつ……」

「まあっ！ 大変だわ、大丈夫フィーリアちゃんっ！？」

「——え？ フィーリア……？ ま、まさか姫様ですかっ！？」

えっ？ と、数秒ポカンとするあたし。

……待て、どういうことだ？ キュデイさんがあたしを心配して
駆け寄って来たのはいい。あれ、でも緊急事態なんじゃないの？
だっけ。今にも殺されそうになってたんじゃないの？ キュデイさ
ん。

ていうか、今、この魔族はあたしを……姫様と呼んだのか？ 誰
……？ 今いったいどんな状況なんだ。

そんなあたしの混乱を感じとってくれたのか、目の前の魔族は――
片膝をつき、深々と頭を下げながら言った。

「お初にお目にかかります、姫様。わたくしの名前はギルヴェー

ル。種族は夢魔——インキュバスです」

インキュバス。……なるほど、道理で彼の魔力から甘い香りするわけだ。インキュバスとは——つまり男性の夢魔、淫魔のこと。地位としては魔族の中で少し低いのだが、世界にとっては一番重要と言える働きをしているであろう。

彼らは誤解されがちだが、別に好きで“やる”ような淫乱ではない。世界から人間を消滅させないように、繁殖を促しているだけなのである。少子化になると困るからね。

それに彼らには、性別がない。たしか決まった年齢を過ぎたら——自分が男として生きるのか、女として生きるのかを決めると聞いた事がある。

サキュバスが女の夢魔で、インキュバスが男の夢魔——決まった年齢を過ぎたら一応性別が別れるとはいえ、たしかいつどんな時にも性別を変えられるはずだ。

夢魔は、サキュバスになって人間の男から精を奪い——インキュバスとなって、女へ注ぐ。こうして人間を育てていつているのだ。決して自分の血が交ざった子供を作る事はないのだが、ただやっている事が“いやしい”というだけで……様々と誤解が多い。ちよつと可哀相な種族でもある。

——ふむ、それにしても。このインキュバス、誰かに似てるんだよな。さっきから気になっていたのだが、なかなか思い出せない……

……つい最近見た事あるような。

「お怪我はありませんでしょうか、姫様」

「え？ あ、ああ……うん。大丈夫。それより——ギルヴェールさん」

「そんな……どうぞ呼び捨てに」

「ううん、しない。あたしはもう姫じゃないんだから。ギルヴェールさんも、堅くならないで普通に接してほしい」

勇者達とは明らかに違う、この対応の差——父上が見たら笑うだろうな。あたしは心中クスリと笑いながらも、先ほどから質問したかった内容を聞いてみた。

「ねえ、ギルヴェールさん。魔族の貴方が……何故こんなところに？」

……そう、それなのだ。夢魔——インキュバスであろう魔族が、こんな人っ気のない孤児院まで来て、人を訪ねている。最初は掟に従ってキュデイさんを殺しに来たのかと思ったけれど、そうでもないようだし……。

彼らは人が沢山溢れる場所へ行くはず。ここへ来る意味は……なんだ？

——ただの疑問として、質問したあたしだった。しかしギルヴェールさんは突如慌て出し、流れるような動作で、頭と手足を床についた。

……これは所謂、土下座、というやつですか？ 異世界に伝わる、究極の平謝り方法なんだとか。父上が教えてくれたが、見るのは初めてだ。なんと美しいフォームだろう。

あたしが呆然として見つめる中——ギルヴェールさんは、その沈黙を怒りと受け取ってしまったらしい。何度も頭を打ち付けながら、寝耳に水な言い訳を話し出した。

「も、申し訳ありません……！ 俺……い、いや私……夢魔のくせして人間の女に夢中になってしまって、それで子供まで作ってしまった……！ でも以前頑張って彼女——キュデイを忘れようとし

たんです!」

「え? え?」

「ですが……仕事をしようと思って、人間の男から精を奪うもののつ……女へいざ流し込んでやろうと思ったら、全然息子が機能してくれなくて!　なのにキュディに会ったら何故かギンギンで!」

「やつ……ちよつ」

そこまでカミングアウトしろとは言っていないよ、あたし!!

「本当に……!　本当に申し訳ありません!　俺のクララはキュディという名のハイジにしか立たせられないんです!!　夢魔としてサボるこんな馬鹿をお許しください……!」

「ちよつ、待った今のネタの意味があたしわからないよ!　どういうこと!」

「ああ俺ってなんてダメなんだ……!　インキュバスとして終わってる……サキュバスとしても生きていけない!　いや、女としてキュディに一度は抱かれてみたいと常々思っておりますが!」

「ねえひとまず話聞こうよ!」

気持ちよく断言をしてくれるギルヴェールさん——内容がすべて下ネタというのが、なんとも救いがたいのだが。

しかし、今のでだいたい掴めて来た。どうやらこの二人は、ちゃんと愛し合っているようだ——人間と魔族、夢物語の恋愛を……目の前で見てしまうとは。下ネタはいただけなが、ギルヴェールさんのキュディさんを真剣に愛する心は、よく伝わったし……心配は全くなさそうだな。子供までいるらしいから——って！

「子供オ！？」

素頓狂な声をあげ、あたしは目をカッ開く。

「じっじっ、じどじど、子供！？」

かなりの時間差があったものの、あたしはようやくそれを理解しはじめた。子供まで産まれてるなんて……、そりゃ焦って謝るよね。

何故なら、先ほども言った通り——夢魔は人間との間に、絶対子をなさない。夢魔は、下級な地位ながらも“魔族”としての誇りを持っているから。だからどの魔族よりも夢魔は人間を“愚か”だと見下している。

……そんな、夢魔が。
インキュバスが。

人間に——恋をした。しかもその人でしか興奮が出来なくなってしまうという、御墨付きで。……まったく信じられない。むしろ、あり得ないだろう!!

それに大変なのはここからだ——あたしが知識として知っている中で、人間と夢魔の間に子供が出来たなど……実例がない。どう育つか、どうなるのか、何もかもが——謎なのだ。

人間にもし、それが知れたらどうする？ 間違いなく玩具にされるか、売られて奴隷になるかの二択だろう。断じて、それだけは阻止せねば。

「……はあ……」

「申し訳ありません……姫様」

「……いや、別に怒ってないよ。恋愛は悪い事じゃないから」

それに、父上は人間である母に恋をしたんだ。なんの不思議もないだろう。……いや、驚いたけどね。

——あたしは一度冷静にものを考えようと、小さく深呼吸を繰り返した。夢魔であるギルヴェールさんと、人間であるキュディさん。二人は出会い、愛し合い、子供ができ、そして産んだ。……はて、そつえばその問題の……子供は？

……あれ、嫌な予感がするぞ。

——ぎぎぎ、と。ぎこちない動きで首を動かし、あたしはキュディさんを見つめた。キュディさんは、ニッコリとほほ笑みながら——
——たった一言。

「そつくりでしょう?」

……その言葉だけで、充分わかりましたとも……。

四（後書き）

タイトルの二名がまったく登場しない件（笑）

次回勇気を必ず出します。

五

キュディさんに言われた「そっくりでしょう？」というその言葉。そう、たしかにそっくり。そりゃもう改めてお二方をみたら、なんですぐ気付かなかったんだと思えるくらいそっくりですよ！ あたしは人間界に来てから、視力が腐ってしまったのかと本気で危惧したほどに。

多分、わざわざ言わなくとも気付く人は多い。そう、この二人は………ガルの、両親なんだ。

ギルヴェールさんから感じる甘い香りの魔力——よく目を凝らせば、“水”の属性ということがわかる。そしてガルの属性は……水。なにより、ガルの瞳はキュディさんにそっくりだ。あの優しいまなざし——ああ、本当に何故気付かなかったのか。

っと、待てよ……？

たしかガルは、母親の方が魔族だと言っていたはずだ。そして、父親が人間。あたしと逆だという印象があったら、聞き間違いはないはずだが……。

あたしはキュディさんとギルヴェールさんに向かって、ガルに聞

いた事をそのまま話した。

ギルヴェールさんが答える。

「ああ……それは、カモフラージュといえいいのかな」

「……カモフラージュ？」

「ああ……。なんせ、あの子はハーフだからね。しかも、夢魔と人間の」

ギルヴェールさんは——ポツリポツリと語る。

キュディさんという人間を愛してしまった、夢魔であるギルヴェールさん。もちろん回りから大反対されて、色々な障害に囲まれたと言う。それでも諦めきれなかったギルヴェールさんは、「自分は魔族から離れる！」と言って、故郷から離れたんだそう。それ是一件落着かと思えば、今度は人間との障害……。しばらくは変装したりして隠れてたものの、ガルが三才の頃にバレてしまったんだとか。

——二人はギリギリに立たされた。迫り来る大勢の人間……このままでは、自分達もろとも、愛しい我が子まで命を落としてしまう。そんなこと、親として認めるわけにはいかない。苦渋の決断をした

ギルヴェールさんは——愛しい妻と我が子を逃がすために、たった一人で人間達に立ち向かって二人を逃がしたんだそう。

しかし、魔族とはいえギルヴェールさんが強い力を持っているわけでもなく——もうダメだと思われた。愛しい二人を逃がせたものの、自分はもうともに歩む事は出来まい。そう思ったほど、窮地に立たされた。しかし。

……魔族を捨てると言ったにも関わらず、旧友や親戚が、駆け付けてくれた。そのおかげで命からがら、ギルヴェールさんは逃げおおせたらしい。

そして再び愛しい妻と我が子に出会えたギルヴェールさんは——
またもや、苦渋の決断をする。キユディさんと話し合い……せめて我が子だけでも、長く生きられるようにと、ガルを隠す事に決めた。

「……ガルは、私達が本当の親という事を、知らないでしょう。キユディはみんなの母、たまに来るオジサンは……食べ物してくれる優しい人どまりです」

「……」

「それでも……私達はなるべく近くで、ガルを見守りたかった。だから孤児院なんかを立ち上げて、多くの子供達の中に……ガルを隠しているんです」

ハハッ、酷いでしょう？——と。ギルヴェールさんは今にも泣きそうな顔をして、言った。

「力がない私には——こういう酷い選択をとるしか、なかった。ハーフと知れるだけならまだいい……“夢魔”と“人間”の子であることさえ、隠せられるのなら……私は……」

「ギル……私も一緒に決めたの。何回も言っているじゃない……」

「いや。すべて俺のせいだよ。……今までの行いのツケが、今回って来たんだ」

深い事情がわからないにしろ、二人がどんな思いでここまでやって来たのかは——よくわかった。二人はガルが大切なんだ。それだけは、揺るぎない気持ち。

……いいなあ。両親かあ。

「——すべては俺がすべて巻起こした事。命をかけて、守ると誓

ったんです。だからどうか……」

「さつきも、言いましたよ」

あたしは笑う。

「あたしはもう、姫じゃないんです。だから、許す許さないの問題でもないし……ガルはあたしにとつても、大切な友達で、可愛い弟みたいなもんですから。誰にも言いませんよ」

——深々と頭を下げるギルヴェールさんを見て、あたしは思った。父上は、こんな気持ちで……あたしを勇者に預けたのかな、って。

……そう思うと、ものすごく切なくなった。

「あらやだ、もうこんな時間——そろそろ寝なくちゃ」

「もう三時か……。キュデイ、俺はちょっと仲間のところに用事

があるから。また明日来る」

「ええ。待ってるわ」

こんな物語みたいなこと、あるんだなあ。……人間界へ降りなく
ちや、こういう事も知る事が出来なかったんだ。

……来てよかった、かも。多分。

「それじゃあ姫様、私はこれで――」

続きを言おうとした、その時。

……こんな夜のふけた時間にも関わらず、玄関からノックするよ
うな音が響いた。私達の顔に警戒の色が走る。

「まさか……そんな。こんな時間に誰が……俺達のことかバレた
のか？」

「……もしかしたら違うかもしれないわ。道に迷った人かもしれないし」

「二人とも、隠れててください。……あたしが出ます」

「早く！」と促すあたしは、緊張した面持ちのまま扉へと近付いた。二人は「すまない」と言って物陰に隠れる。

それを確認したあたしは、一度深呼吸をしてから——ゆっくりとその扉を開いた。

「はい。どちら……さ……ま………っ」

ピシリ。

あたしの今感じた効果音をあげるならば、多分それが一番適切な言葉だろう。多分今あたしの表情は、作った笑みのまま冷や汗を流し、固まっているはずだ。

——冷静な判断など皆無。あたしは問答無用で、その扉を勢いよく閉めた。物陰に隠れていた二人を伺うと、その顔にはやはり「あ

の人って……」みたいな表情が浮かんでいた。

まずい。これはまずいことになった。あたし、なんのためにここにいて、匿ってもらってると思ったんだ。警戒もしず自ら現れちゃうなんて……本当にあたしのばか野郎。

——再び繰り返されるノックの音を無視しながら、あたしは勝手に扉を開かれないよう精一杯の力を持って扉を押さえ付けていた。わあ、大変だ。コイツ本気で押し返して来やがる！

「んぎっ、ぐぎぎぎぎっ！」

「ひ、姫様……？」

「フィ、フィーリアちゃん……」

唾を飲み込み見守る夫婦の視線を……背中いっぱいを受けながら、あたしは今日一番の頑張りを見せる。この扉を開かせてはならない。だって……もし開いてしまったら——！

いきなり抵抗がなくなった扉。油断作戦か……！ と、そう思ったあたしは、真横にある窓の存在など気付かず——再び来るであろうと予想する衝撃に耐えるため、しっかり扉を押さえていた。だからあたしは馬鹿なのである。

窓からヒョイッと首を潜らせ、こちらを見ている——勇者。そちらに背中を向けていたためか、まったく気付かないあたしは……その窓から器用に身体を通らせる勇者に気付かず、ひたすら扉を守っていた。

気付いた時には、トントんと叩かれる右肩。

「え？」

「……」

「……あれっ」

「……」

「お……おば……」

「俺は生きてる」

……いや、お前むしろ人間じゃないだろ。どうやってたらそんな小さな窓から入り込んだんだよ。あそこの夫婦がアンタ見て絶句してるじゃないか。マジでどうやって入ったんだよ！

目ン玉をカツと開いて驚愕するあたしの横で、勇者はとても清々しそくに肩をポキポキ慣らしていた。……え、人間……だよな？あれ、この人同族だったっけ。

白銀の美しい髪をサラリとはらい、勇者は孤児院の中を眺めまわしていた。夜のせいかな、その青い瞳は少し色が深くなっている。とっても絵にはなる光景だ。化物まがいなことを、されなかったら……だが。

「……」

「……」

ひたすら続く、沈黙。

あたりを眺める事に飽きたような勇者は、さて……と言わんばかりの視線であたしを刮目した。その、冷たい眼で見下ろされ……怖いのに、とにかく反抗したい気持ちに駆られる。コイツ——勇者を見てると、どうしても素直に従いたくなくなるんだよね。最初の印

象もあるかもしれないけれど、それでもやっぱり……コイツが嫌い。

理由の掴めない感情のままあたしは、勇者になんだと言いたげに眉を上げてみせた。奴も奴で、別に……とでも言いたげに見下ろしている。くっそ、足の骨折って背え低くしてやりてえ。ダメかな。……ダメだよな。

……いつまで続くのだろう。あたし達はずっと睨み合いながら、なにかの機会を伺う。正確には、あたしは“逃げれる機会”をただけ。勇者に関しては、多分……“捕まえる機会”を、かな。知らないけど。

しかし、誰よりもその沈黙に耐え兼ねた人達がいるのを、あたしは忘れていた。

「あの……貴方は、勇者様………ですよね？」

……疑問系なんだね、ギルヴェールさん。いや、気持ちはわかるけど。

「……ああ」

「ええと、あの……どのようなご用件で？」

あ、そうか。ギルヴェールさんは知らないんだっけ。あたしがこいつから逃げて来たってこと。キュディさんはガルから聞いて、“勇者に追われている”ということは知っているはず。ガルには咄嗟の嘘で、“命を狙われている”と言っちゃったけれど。

あたしは焦りながら、勇者とギルヴェールさんを交互に見た。…もし、勇者が“魔族”であるギルヴェールさんを、殺そうとしたらどうする？ いや、愚問だな。答えはもちろん、“勇者を殺す”……だ。

命をかけてでも、あたしは同族を守ってやる。それが……あたしの、“魔族”としての——いや。“魔王の娘”としての、意地だ。……絶対に殺らせやしない。

「——捕獲をしにきた」

「捕獲、だと？」

「ああ」

「……やはり、勇者までもが……」

「……………」

「貴様までドウルーダムの手先に落ちるとは……！ そんなに魔族が憎いのか！？」

……う、うおおおおお！ うまい具合に話が噛み合っている！
本当は噛み合っていないけれど！

あたしは大人しく、この成り行きを見据えた。どうなるかはわからないが……少しでも勇者が手を上げたら、あたしも容赦はしない。全力で殺しに掛かってやる。

「ドウルーダム……？」 “異世界の科学” とやらを盛り込んでい
る、あの先進国のことか……」

「知らんふりをするな。奴等に言われて、“捕獲”をしろなどと
言われたのだろう……！」

「……？ 奴等に言われてではない。俺は、自分の意志で捕獲を
しにきた」

「ハッ！ 自分の意志だと！？ 毛の先までドウルーダムに染め
られた猛犬め……！！ 絶対に、渡しやしない！」

「……なら、武力行使だ。手加減はしない」

「くっ……！ 二人とも、逃げるんだ！ ガルを連れて！！」

……どうしてくれよう。この、うまい具合に噛み合っている、世界一噛み合わない人達を。

「あ、あの……ギルヴェールさん」

「いいんです、姫様。私も魔族の端くれ……貴女様に戦わせるような事はしない。ガルを連れて、どうかお逃げください」

「……！ 魔族……なるほど。お前は“夢魔”——インキュバスか」

勇者が……気付いてしまった！

鋭くなった瞳に気付き、あたしはうろたえた。やはり——勇者は、“魔族”が嫌いなのだ。このままではギルヴェールさんが父上のように……。

——ボロボロになった父上の姿が脳裏に浮かび、あたしは背筋を凍らせた。父親を失うなど……ガルが知ったら、きっと悲しむ。絶対にさせるものかっ！

あたしは、勇者とギルヴェールさんの間に立った。二人の視線が……身体の前後に突き刺さる。

「姫様!？」

「聞いてギルヴェールさん。こいつはガルを連れて行くこうとしてるんじゃないの。あたしを連れて行くこうとしてるだけだから」

「え……?」

「大丈夫——大丈夫だから。もう絶対に——同族を殺らせはしない」

あたしは笑顔で言うてから、目の前の勇者へと向き直る。

「もう、絶対に。……殺らせない」

「……」

「これ以上……あたしの仲間を、減らされてたまるか」

そう、それが——“悪魔の子”、オコナム力を引き継いだ者のすべき事だ。あたしは魔族を守る。そして、その家族も守る。

魔王城にいた——メイド、執事、庭師、料理長、大臣。もつとつと沢山いた……あたしの仲間。みんなは、父上とあたしを命懸けで守ってくれた。ならばあたしも——命懸けで守らなければならぬ。

「……一緒に来い、フィーリィ」

「——言わなかったか？ あたしを、フィーリィと呼ぶなと」

「……さあな」

「あたしをそう呼んでいいのは——あたしが、その人を“特別”としている者だけだ」

ギリリと光る、勇者の瞳。……人間は、コイツを正義だという。
これを見ても本当にそう言えるのか？　まるで、獣だ。人ですらない。

「……一緒に来るならば、ここは見逃そう」

「……」

「どうする」

「……ちっ」

「それは、肯定として受けとるが？」

片方の眉を上げながら問う、勇者。……どこまでも気に食わない。
ああ、本当に殺してやりたい。でも、掟に従うならば——殺しちゃ
っても問題ないんだっけ。

……いや、我慢しろ。あたしはなんのために、生かされたんだ。
父上の気持ちを踏みにじるな。

——あたしは溜め息を吐いて、勇者を視界から逸らした。……一分一秒でも、コイツなんかを視界に入れたくない。できることなら、存在すら認めたくないのに。

「行くぞ」

「……」

「姫様！」

「フィーリアちゃん！」

あたしを止めるような声。……ま、ギルヴェールさんを救えたんだから、儲けもんだよね。うん、これなら父上も喜んでくれそうだな。

あたしは苦笑しながら、「ガルによろしく言ってください」と残して……勇者を追うようにしてその場を去って行った。

……あーあ。逃げれたと思ったのに、結局これか。なんでわざわざ、あたしを連れ回すんだよ。まあ、“魔王の娘を手下に従えた”とでも思ってるんだろうけどな。……ハハッ、本当にあたし家畜みたいだ。切ないなあ。

遠くなる孤児院を見つめながら、あたしは惨めな気持ちで歩くの
だった。

五（後書き）

これから少しずつ勇者に奇行をさせようと思います。

次回も勇者出ますので、気付いたら是非指をさしながら笑ってやってください。

六

「……はあ」

聞こえないように吐いた、小さな溜め息。さくさくと草を踏み締めながら、あたしは今……町の方へ向かっている。完全無表情の冷血悪魔——勇者の背を追いながら。真つ暗闇の中、もの憂鬱げに。

「……」

「……」

会話などない。だが……さすがにこの静かな夜道でなんの会話もないと、少々居辛くも感じる。まあ勇者なんかと話す内容なんて、これっぽっちもないのだけど。いや、しかし、これは……居辛いどころか、究極に気まずい。暴言を吐いて勇者達の元から逃げたのも

あつて、なおさら。

でも、勇者も勇者だ。わざわざあたしを見つけに、此所までこなくていいだろうに。あのまま放っておいてくれたら、どれほど楽だったか……。そりゃ、人間からしたら“魔王の娘”とは、魔族に良い打撃を与えるだろう。くわえて人間も大いに喜ぶ。

……そこまで、嫌われているとは。何故人間はそこまで愚かなんだ？ 自分より強い力を持つものを、何故そこまで恐れる。しかも人間は勘違いばかりが多い……。自分が強いと思えば、弱い者を虐げ上に立とうとするし。本当に強い力を持っている奴もそうだ。

人間に対する不満を、心の中でダラダラと流し続けるあたし。貴様なぞそこのドブに足をツッコミ己の不甲斐なさに落胆し失業者になってしまえ——と、勇者を睨みながら考えていたせいだろうか。殺気の混る視線に気付いた勇者は——急に立ち止まり……。振り返った。

その、月明りに照らされ光り輝く——青い瞳。鋭く細められた瞳に見据えられたあたしは、本当に声にだして罵倒しかけた口を……。自然と噤んでいた。危なかった、マジで。

——しかし。勇者は本当に、作り物のようだ。まるで精密に仕上げられた人形のよう。シンメトリーで不自然さがまったくないはずなのに、逆にそれが不自然に感じてしまうほど——かなり、完ぺきに仕上げられている。

あたしは多分……コイツ以外に、勇者らしくない勇者を知らないだろう。今まで勇者まがいな事をしてきた熱血人間とは違って——コイツは、“仕事”をこなすかのように淡々としている。それ以外に、生きる意味がないかのような。

……いや、ちょっと違うか？　むしろ本能で動く、野性的な人間。熱血とは違うけれど、熱い何かを宿し——目的を果たしているような。それが“人間”のためを思っているのか……“魔族”への憎しみからきているのか。あたしには、わからなかった。

勇者という“人間”が——まったくわからない。

「……フィーリィ」

しばらく見つめ合った——否、睨み合ったのち。勇者は懲りもせず、あたしの愛称を呼んだ。

もちろんあたしは舌打ちを返す。

「あたしの愛称を気安く呼ぶな。……吐き気がする」

——ピクリ。

勇者の眉が、不機嫌そうに潜められる。

「……じゃあ、なんと呼べと?」

「フィーリア。……もしくは魔王」

「魔王はもういない」

「いる、ここに。あたしは……父上の力を譲り受けたのだから」

「往生際が悪い。お前はもう人間だ」

「……」

「それと、フィーリアよりフィーリィのほうが言いやすい。それが嫌なら——」

「……?」

「マグロと呼ぶ」

……なんで魚なんだよ!?

「もしくはシャケ。もしくはサバ——それも嫌なら、サンマだ」

「……。ケツの穴手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わせてやろうか
コラ」

「お前は女だろう、汚い言葉を使うな。まったく、理解できん……」

そりやお前だよ！ と叫び倒し地団駄を踏みたくなるあたしは、
おかしいだろうか。魚の名前で呼ぼうとするやつより、よっぽどマ
トモだと思っただが。

せめてクジラとかサメとか、イルカとかあるだろうよっ！ なん
で完全食い物系の海の生き物なんだ！ いや美味しいけどね!!

——立ち止まったままこちらを呆れて見る勇者に対し、あたしは
憤慨したように顔を歪ませる。やっぱり、理解不能。勇者という人
間がサッパリわかりません。それとも、人間とはこういう生き物な
のか？ ……自分が一応同じだと思うと、鬱になる。

そして、そんなあたしに勇者は追い討ちをかけた。

「——さあ、どつする？」

「？」

「フィーリイ——お前は魚か、否か」

「否だよ！！　　ってか何気に父上のセリフをパクんなっ！！」

あゝああもうっ！

誰かコイツをなんとかしてくれ！！

「そうだ、フィーリイ」

「……もう勝手にしろ……」

「マグロ」

「そういう意味じゃない！」

「フィーリイ。そういえばさっきの奴等はなんだったんだ？　ド

ウルーダム……がどうのと言っていたが」

……勇者って、疲れるタイプの人間だったんだな。もちろん疲れるのはこちら側。

あたしは諦めて、勇者にあそこへ行った経緯から話した……。その間、余計なチャチャを入れずに、勇者はちゃんと話を聞く。ガलगントという少年に会った事、ちよつと嘘を混ぜて追われていると言った事、あの夫婦の事情など——すべて話し終えたあとで、あたしは真剣に勇者の表情を伺った。

……もし今ので、勇者があのか夫婦を“敵”と見なすならば。あたしは、全力で戦うつもりだ。父上が敵わなかった勇者に勝てるとは思っていないが——それでも、あたしは“魔族”の心を忘れたわけではない。

勇者がどの行動を取るか。あのか夫婦には悪いが、見定めのため少し協力してもらった。……大丈夫、もし最悪の事態になってしまっても、絶対勇者を逃しはしない。相打ちに持ち込んでやる。

——だが、勇者は。

あたしが考えているような事には、ならなかった。

「そうか。あのか夫婦も大変だな」

「……………それだけ？」

「？ ……あの夫婦も大変だな、とても可哀相に」

「言葉の少なさでなくて」

なに、コイツ馬鹿なの？ 死ぬの？

「よくわからんが、俺は別に狙ってなんかいないぞ」

「……………本当に？」

「ああ。別に、俺の敵ではなさそうだしな」

……………少し、いやかなり、拍子抜けだった。想像では……………もっとこう、魔族にたいして恨みとか持ってそうだったから。

でも。それならば、何故勇者なんかになったんだろう？ 勇者は魔族を滅ぼす存在だ……………なのに魔族をみすみす逃すだなんて、こっぴどくちゃんだけど——勇者らしくなさすぎる。

少し興味が沸いたあたしは、今まで嫌悪していたのも忘れて――普通に、素直な疑問を問い掛けていた。

「ホントに勇者？」

「……ふ。よく言われる。基本的にいつも疑問系で問われるな」

「だろうね。今まで父上を襲って来た偽者勇者のほぅが、よっばど勇者っぽいし」

正直な意見に、勇者は初めて笑みを浮かべた。……その目を見張るような美しいほほ笑みに、少なからずドキリとする。

……イケメンとは、実にお得だ。多分大抵の犯罪も、そのお顔でパスされるのだろう。勇者の将来が不安だ。

「まあ、好きでなっただけでもないしな」

「……？　じゃあなんで勇者に？」

「……。人探し、だな」

そう言って、勇者は何故かあたしを見つめたあと……含み笑いを返した。

……意味がわからん。なんであたしを見て笑う？ ていうか、人探しで勇者になっただなんて……それで倒された父上って、いったい。あたし、惨めだ。

「……」

「……悪い、こんな理由で……お前の父を追いつ込んで」

「……別に。その人探しは、終わったの？」

「ああ、見つけたよ。なかなか懐いてくれなくてな……ずっと不機嫌で、よく牙を向かれる。手を焼いているんだ」

「……？ ふうん……猫みたいだね」

「ふ……ああ、そうかもしれない」

この勇者が手を焼くほど、手強い探し人。いったい誰だろう？

間違いなく、勇者一行の中にいるはずだ。マリンベール？ 違うな、幼馴染みと言っていたし。じゃあ、ジューエリー・クリアウォーターか？ …… あれはどっちかというと、犬だ。

あと一行のメンバーと言えば……、聖職の小さな少女と槍使いの青年、エルフの女くらいか。……どれも、猫といった印象は受けないが。いったい誰なんだ？

「勇者にも手名付けられない奴っているのか……」

「……まあな」

「凄いなあ」

「……ああ、いろいろと凄いよ」

再び含み笑いをする勇者を怪訝に見つめて、あたしは首をひねった。……へんなの。

——しかし、どうやら勇者はそこまで悪人じゃないことだけはわかった。それを知ってなんになるんだとも思うし、憎らしい気持ちが無くなったわけじゃないけれど……前よりはムカつかない、かな。

父上のためにも、人間になろうと努力はしたい。そのためにも…
…勇者のことを少しずつ、許していかないといけないだろう。今は
殺してやりたいくらい憎いけど、もうちょっとしたら——噛み付き
たいくらいに、ね。

はあ……出来そうにないなあ。

七

今朝まで居た——正確には昨日になるのだが——あの宿舎の一室の前、あたしと勇者は今……小さな攻防を繰り返していた。

お題はもちろん、“この部屋に入るか入らないか”、についてである。

「んぎっ、ぐぐぐっ！ い、いやだ……！ あんな奴等に……ぐっ……謝るくらい、ならあー！！」

「我が、儘を……！ 言っなっ！！」

「このっ……ぬぐ！ 離せこの魚介類好きめ！！」

「くっ——シヨタ好きに言われたくない！」

「な！ 何故知ってる！？」

「企業秘密だ！」

こんな小さな戦いを初めて、どのくらいの時間が過ぎただろうか……。とりあえずわかつているのは、窓から覗く空が白み初めているということ。ふむ、つまり小一時間は経っているということか。なかなか迷惑なくらい粘るな、あたし。もちろんまだ諦めないけど。

まあ、まだ一応夜中という事もある——若干声は押さえめにするという、それなりの常識は心得ているあたし達。いや、だからこそ大きな真似も出来ず、ドングリの背比べとも言えくない戦いをするはめになっているのだが。あ、ドングリの背比べというのは父上に教わったコトワザというもので——

「ハイハイ。君達いつまでも夫婦漫才しないで、さっさと中に入ってくれるかなあ。二時間も通行止めされてる僕のめにもなつてよー？」

え？ と、あたし&勇者は——ふと聞いた飄々とした声に導かれ、そちらを同時に伺った。

そこにいたのは——勇者よりも見上げるほどデカイ身長、スラリとした体格、性別の区別がつかないほど中性的な甘いマスクを被った……黄金の青年が。

……あ、黄金というのは別に、服装のことではない。今はまだ少

し暗いのでわからないと思うが、太陽の元へ出ると「待ってました我が主役の時！」なんて言っていそうなくらい、彼の“金髪”が眩しいからである。名前が目茶苦茶長かったので、覚えられなかったのだ。だからあたしは“黄金”と呼んでいる。……心でね。

彼は腰まである長い髪を乱暴に掻いて、退屈そうにあたし達を見ていた。……年上のお姉さん達の前じゃ、いつも凜々しくしているくせに。この腹グロ二重人格め。

勇者の次の次ぐらいに嫌いな人物だったので、あたしは自然に表情を歪めた——それに黄金野郎も気付いたのだろう。彼は意地の悪い笑みを浮かべて、一步、また一步とあたしに近付いて——言った。

「嫌そうな顔してくれるねえ——だからガキは嫌いなんだ」

「近寄るな、目が潰れる」

「ハハッ、まあ僕くらい顔が整つてると……君なんかの目じゃあ許容範囲外だろうしね」

「ホントにな。暗闇で生活してきたあたしには、まだ直射日光はかなりキツイ。だから早く退け」

「これだからガキは嫌だね。淑女なら日傘の一つでも持たなくちゃ」

「日傘で防げるレベルを優に超えてる。だから退けて」

「はあ……まったく。君はホント陰気臭いねえ、ガキならガキらしく無邪気であればいいものを。どうにかならないのかい？」

「勇者、お前の仲間はまだあと四人いたな」

「ああ、だが早まるな」

……ちつ。

どうやら勇者に読まれたようだ。頷くだけならイケると思ったのに。あああ、ムカつく。コイツ本当に父上の専属執事にソックリだ……。この黄金野郎もあの執事みたいに、「淑女としての嗜みを忘れるべからず」とか、「そんなですから知能に著しい問題を抱えるのですよ」とか、ニツコリ笑って嫌味を言うタイプだ、絶対。ていうか今されたじゃないか。

……証拠が残らなければ、やつちゃってもいいかな。いいよね、腕の一本くらいなら。あ、勇者に遮られた。くそう。

「はあ……それより、もっと早く声をかけてくれてもいいだろう——ベルヴァロスクエッド」

これ以上あたしの怒りを増させないためか——話を変えるように、勇者が無理矢理間に割り込んで来た。あたしが“うっかり”魔法を放たないように、しっかりと両腕を拘束しながら。用意周到な奴め。

——しかし。ベルヴァロス……なんだって？ 前にも聞いた事のある文字の羅列のようだったが、未だ全部を覚えきれない。長すぎる名前……何故縮めないんだ。あ、でもそういえば——マリンベルがその理由を解説してくれたような。ええと、なんだったか……ああそうだ、「フルネームの方が威厳でるだろ？ って言ってるのよ」。面倒だからたまに“金髪”とか“ゴボウ”って私呼んでるのよね”と言っていた気がする。気がするじゃなくて間違いない。だって「ちよつとゴボウ！」って呼んでいたのを見たし。そのあとかなり説教食らってたけど、マリンベル。

だが、マリンベルがそう呼んでいるなら、あたしもそう呼ぼうか。眩しいし、黄金と呼んでも差し支えなさそうだな。……いや、それでは本物の黄金に失礼な気がする。ならなんて呼ぼう？ だが……ゴボウも本物に失礼な気がして来たぞ。しかしそう思うとすべてに失礼な気もしないでもない、というか。ああ、キリがない。

真剣に悩み過ぎていたのだろう——あたしは、気付いたらいつの間にか……部屋の中に入っていた。しかも、勇者に荷物担ぎされて……何故荷物担ぎなんだ。別に期待してたわけじゃないが。

しかし——ハッと気付いた頃にはもう遅い、というやつで。中にいた勇者一行達は、入って来た勇者に担がれたあたしを見た途端……それぞれの反応を返した。

その声の音量にビックリしつつ、あたしは身体を縮こまらせる。

中でも声の大きかったマリンベールは、担がれたままのあたしを見るなり、一番に駆け寄りながら心配そうな面持ちで言った。あたしはあたしでとにかくキョトン。

「——ああ、よかった！ フィーリアちゃん、怪我とかしてない！？ てゆーか、勇者ってば女の子を荷物担ぎするなんて……そこは普通お姫様抱っこでしょ！？」

「……？ お姫様抱っこ？ なんだソレは」

「はあ！？ アンタ……お姫様抱っこ知らないのおっ！？」

「……別に間違っではないと思うが。元魔族の姫を抱っこしていいわけだし」

「バツカかこの究極ド阿呆勇者が！ アンタ今までどうやって“男”を学んで来た！」

「？ ……マリンベール、落ち着け」

「うがああああっ！ コンのマイペースがあ！ ちょーイラつくっ！」

……それはごもつとも。

「オイオイ、マリンベール。朝っぱらからうるさいぜー？ 乙女じゃないねえ」

「うっさいわこのウルトラナンセンス！ ゴボウはゴボウらしく黙ってなさい！」

「だからあ、僕にはベルヴァロスクエッドっていう名前があると何度も——」

「ああもう、はいはい！ デクノボウクエッド！」

「ベルヴァロスクエッドだ！」

……すごい。あの黄金野郎よりも優位に立っている。マリンベールって、案外凄い人だったのか……。かなりお喋りで少しウザいなあと思っていたが、改めなければ。……うん、マリンベールとはこれから仲良くしていこう。

感心するあたしの横で——ちなみにまだ担がれているが——段々バトルが白熱するマリンベールと黄金野郎。旅の間基本的にまわりをそこまで見ていなかったが……多分コレはいつもの事なのだろう。他の連中は慣れた様子で、朝のモーニングとシャレこんでいた。慣れ過ぎだろう。

やっとあたしをソファに降ろした勇者は、その真横に座りながら……二人を余裕で無視していた。そして、テーブルに置かれたパンを手に取り優雅に頬張っている。時々あたしに差し出しながら。

二人のバトルを見逃すまいとしていたあたしは、その差し出されたパンを見ずに頬張る。そしてまた差し出してくれるので、あたしは二人の言い合いを見逃す事なく観察出来た。……ううむ、餌づけをされている気分だ。しかし便利なので拒めない。ヨシとするか。

「——だいたいねえ！ わざわざフルネームを呼ばせる方が威厳ないっての！ いったいどこの宗教よ、気持ち悪い！」

「はあああん？ この僕を目の前にして、気持ち悪いだと？ ったく、これだからガキは！」

「ハンツ！ この若作りがなあに言ってるのよ！ この三十路！」

「三十路い！？ 僕はまだ二十九だっ！！」

「四捨五入したら三十路でしょうが！ 往生際悪いのよこの中年が！」

「わざわざ四捨五入をする意味がわからん！ そんなだから男が寄ってこないんだ！」

「なんですってえ！？ オッサンにピチピチ少女のなにがわかるのよっ！ オッサンはオッサンらしく隠居してるこのクソじじい！」

「せめてオッサンで止める！！ まだじじいじゃないぞ！」

……ほほう、ますますマリンベールの好感度が上がっていくな。あのナルシスト野郎をああも言いくるめられるとは。

あ、今勇者がくれたフルーツ美味しい。食べたことないや。多分表情に出たのだろう……他の食べ物を含んでちよくちよく差し出してくれた。うーん、うまい！ おっ？ 本格的な乱闘が始まった。いけ、そこだ！ マリンベール、そいつをやつつけろ！

——と、あとちょっとでマリンベールがナルシーに首絞めをするところだったのに、第三者が唐突に現れてしまった。エルフの女——ロックハートだ。

「そこまで。マリンベール、やめなさい。下の階の人に迷惑が掛かるでしょう」

「えーっ！ いいじゃないロックハート、あと気絶させるだけよ！」

「こら。そういうことは部屋でやらない。ほら、まだ朝食が食べ掛けだ。さっさと食べべ」

「……ちえーっ」

ドスンッ、と。羽交い締めに使っていた黄金野郎を、残念そうに手放した。……もう気絶してるじゃないか、凄いなあマリンベール。

「……さて、と。勇者、お姫様も戻って来たし。早々にここをでるかい？」

ロックハートの視線が、あたしに移される。……妙に気まずい。そしてそんな気まずさにチャチャをいれるがの如く、哀れ女が言った。

「ていうかあ、あんな大口を叩いて置きながら戻って来るとか。恥ずかしくないのかしらねえ」

「……ジュエリー嬢、そういうことは言っていけないよ」

「はいはい。貴女本当に口うるさいわねえ」

……くそ、この女。勇者よりもム力つくな。おっと、勇者がまた腕を掴みやがった。何故わかったんだよ。

そんな勇者はあたしの腕を掴んだまま、確認のためロックハートに問い掛けた。

「ロックハート、パリシュまであと歩いて三日だったな」

「ええ、勇者。……ああ、そういえば先ほど、黒鳩郵便で何者かわからない方から便箋が届いていたよ」

「なに？」

「ただ、裏にドクロの絵が。……しかもこの絵は」

パサリと、テーブルに置かれた小さな便箋。この、ドクロの絵は——まさか。

「——なるほど。アイツか」

「どうする？ 寄ってもいいが、間違いなく厄介な頼みごとが待っていると思うよ」

「……はあ。無視するわけにもいかないだろう。目的地をいったん変えて、オールドビリに向かう」

「わかった。なら、すぐにも出ようか」

……オールドビリ。そこはかつて——母が住んでいたという、町。父上が教えてくれたが……いや待て、何故そんな所へ行くのだ？ だってこの便箋に書かれた絵は——魔界にいたあたしでも知っているほど有名な、あの大海賊のマークではないか。いったい、どんな繋がりか。

あたしが食い入るように見つめていたせい——勇者は気付いたように、その便箋の封を開け、中身を見せてくれた。そこにあった手紙に書かれた文字……それはただ一言、「来い」だけ。

勇者は言った。

「古い馴染みだ。こちらではけっこう有名な奴でな……一番よく聞く話は――」

「異世界から呼んだお姫様と駆け落ちをした、大海賊。お城に突撃して姫をさらったんでしょ？ 今はもうその海賊業を止めてるって聞いたけど」

「……なんだ、知ってるのか」

勇者は驚いたように目を見開いた。あたしが人間界のことを何も知らない、箱入り娘だとも思っていたのだろう。馬鹿な、これでも努力の末、父上の目をかいくぐって調べたりしたんだよ。

あたしはその便箋をまじまじと見つめながら、その努力の数々を思い浮かべた。……うーん、父上って、ホントに地獄耳ならぬ地獄目だったんだよなあ。あとちょっとという所で捕まっちゃうんだ。まったく、どういう目えしてたんだが。……いや、もちろん視力も受け継いだから、凄さはわかってるけれど。

それにしても――かの有名な大海賊が、古い馴染みだなんて。勇者、本当に凄い人だったんだなあ。

大海賊……その名も“クレイジーブルーキャット”、通称、お騒がせな海の猫——とも呼ばれているらしい。いろいろ呼び方はあるのだが、今のほうが個人的に気に入ってたのもあり、記憶していたのである。

彼らの船長——エーファンという男。昔、それはそれは女つたらしな奴だったらしく、聞くところによるとまさに“女の敵”と言われそうな人格の人間だったんだとか。

そんな彼の目の前に現れた一人の少女——サヤコと呼ばれた異世界の人間は、ちょうど城から逃げたして来た真つ最中だったらしい。噂では、異世界にただ一人残された妹が心配だったから抜け出した、とか。

そんな出会いから始まった二人、様々な障害があつた末——エーファンの方がいつの間にか少女を溺愛し、それに気付いた少女もだんだん惹かれていった。

しかし突如現れた城の人に船員の人質を取られ、泣く泣く城へ。

愛する我が女を助けるべく、エーファンは城に挑戦状を叩き付けた——そして命からがら抜け出した少女とエーファン、そして一緒に戦った船員達。

長い航海を経て、少女が出した結論は——やはり、元の世界へ帰らねばならないという言葉だったらしい。

少女とエーファンは約束を交わす——「いつか必ず、お前の世界にも名が轟くような海賊になってみせるから。それまで……男は絶対つくんなよ」「ええ、私は貴方のせいでもう他を愛せないもの。

いつまでも待ってるわ」……と。

——なんて夢のような話だろう。初めてこれを聞いた時、少しうるつと来てしまったほどだ。まったく、いい男じゃないかエーファン！ 人間だけど、嫌いじゃないよそういうの。

あたしは想像に胸を膨らませる。たしかあの後エーファンは、海賊業を休業してると聞いた。何故かは知らないが——いやあ、まさか生で会えるとは！ サインとかもらえないだろうか。

会えたらちよつと頼んでみよう——と思っていたら、何故だか勇者があたしをジットリとした視線で見つめていた。……なんだよ、気味が悪いな。

視線が合った事に気付いた様子の勇者は、そのジットリとした視線のまま——恨みがましく言った。

「人間界のことなのに、何故エーファンを知ってるんだ」

「……？ まあ、有名だったから」

「けっこつ詳しそっだが？」

「……そりゃ調べたし」

「何故調べる」

「はあ？ ……何故って……まあ………」

「……」

「……。特に、理由は、ない」

「嘘だッ！」

「ぎゃっ！！」

ななな、なんなんだ！？

急に覚醒をした勇者に驚き、あたしはいつの間にか横にいたマリ
ンベールに、ギュッと抱き付いた。

「わっ、嬉しい！ 私を頼ってくれた！」

「……」

「なーによー勇者ー、羨ましいのお？ ぶっ、ドンマイー！」

「……三才の時道端に落ちていた小石を鳥のフンと間違え——」

「ちょ！　つとお、タンマァー！　勇者アンタ、それ卑怯よ！！」

……フンと間違え、なんだ？　凄い気になるぞ。

しかしいいのだろうか——こんなに馴染んでしまつて。今でも、勇者達が同胞を殺したのを覚えているというのに……いやでも、父上は人間に戻れという事を望んでいるだろう、いいんだ、これで。

あたしは吹き出る思いに蓋をして——立ち上がり、窓の外を覗いた。きつとこうして、あたしはいつの間にか魔族だったことも忘れていくのだろうか。この先には、いったい何が待ち受けているのだろうか……？

一人、打ち寄せる孤独に苛まれながらも、あたしはブーツと町を見た。

……人間の住む、小さくも大きくもない、普通の町。平々凡々と生活をして、戦う事さえも忘れていく——平和な奴等。あたしは、ソレになつてしまうというのか。……なんと皮肉なのだろう。

道を行き交うひとごみを見つめていたあたしは、自然と溜め息を吐いていた。……あたしも、最初から人間だったら……今こんなに

苦勞することはなかったんだろうか。いや、でも、あたしは父上と
いられて幸せだった。だから……これでいい、はず。

……ああ、わからない。いったい何が正しい？ こう迷ってしま
うのも、やはりあたしが元は人間だから……なのだろうか。まった
く、本当に皮肉だな。

無邪気にフラフラ走る子供を見つめながら——あたしは再度、溜
め息を吐いたのだった。

八

ん？ フラフラ……？

あたしはその、危なっかしく走る小さな少年を見つめて、小首を傾げた。父上の視力のおかげでハッキリと見える、その少年の顔。
あの子は――

「ガ――ガル!？」

突如叫び出したあたしに驚いた、勇者達。しかしあたしはそれに反応は返さず、ただフラフラ走る少年――ガルを見つめていた。

……ガルは、相当疲れているのであろう。走るといふより、早歩きといった速度で……精一杯身体を動かしていた。そして度々、町の人に「助けて」と問い掛けている。……傷だらけの、まま。

勇者達の、止めるような声。あたしはそれすらも無視して——悠々と窓から飛び降りた。そして倒れる直前だったガルを、抱き留める。

「ガ、ガル！？　どうしたのその傷——！」

「あ……その声……は……、フィーリアお姉、ちゃん……？」

声にだそうとして、あたしは胸を詰まらせ、その口を閉じた。……
……なんとしたことだろうか。ガルは……今、目が見えていない。失明してしまったようだ。

……何故、人々はガルを助けなかった？　皆、見て見ぬフリをしている。こんな幼い子供が……傷だらけで叫んでいたと、いうのに。

——ガルが、ハーフだから？

「お……姉、ちゃ……」

「ガル……っ、喋ったらダメだよ。手当てするから大人しく……」

「お姉ちゃ、ん……助け、て………お父さんと……お母、さん
が………」

あたしはその言葉に驚いて、手当てをしようとしていた手を、止めてしまう。

「ガル……なんでそれ」

「……えへへ……知ってる、よ……？　だって……」

ぼくの、パパとママだから。……ガルはそう言って、にへらと笑った。

……ガルの「助けて」という言葉で、だいたいわかってしまった。間違いなくガルは、ドウルーダムの連中に襲われたんだ。そして、あの夫婦はガルだけでも逃がした……と。

あたしは自然に流れていた涙を、乱暴に拭う。泣いてる場合じゃない、ガルが助けを求めているんだ……あたしが何とかしなくては。

——あとを追って来た勇者達。その中にいた幼い聖女……プリエ
ステルは、ガルを見た途端顔色を変え、すぐさま回復魔法を掛け始
めた。

「酷い出血です——フィーリア様、この子はハーフですね？ 属
性はおわかりになりますか？」

「水です」

「わかりました——少し手伝っていただけますが、ロックハート
様」

「ええ」

道端。幼い少年を囲み手当てをしているというのに——それでも、
町の人間は無関心だった。あたしはそれを見て、自然と呟く。

「やっぱり……愚かだ」

「……フリーリイ？」

勇者が問う。

しかしあたしは、続けた。

「人間の行動が——理解できない。半分とはいえ、同族だろう？
何故無視できる」

「……」

「何故——何故、なんだ。まだ年端もいかない、こんな小さな少年が……傷だらけで助けを求めていたというのに」

「フリーリイ……」

「あたしには……！ わからない……何故、何故そんなに非情で、愚かなんだ……！ どうして無関心になれる……！」

「……」

「人間には……“心”がないのか……！！」

乱暴に拭ったはずの涙が、一つ、また一つと……地面に吸い込まれていった。もう拭うことすらも忘れて、あたしはただただ——嘆く。

——人間は愚かだ。魔族とは違い、平気で同族を殺める事ができる。むしろそれが生き甲斐と思う輩もいて、“心”が不安定な生き物なんだ。しかし……それもまた、悪いところと決め付ける事はできない。だから、人間は面白い。

……父上が昔、そう教えてくれた。だからあたしもそう思うようにした。でも、あたしにはわからない……“人間は面白い”？面白くなんかない——人間は、ただ非情で非道、魔族よりも魔族らしい……悪魔のような存在だ。

あたしにはわからない。何故子供を——簡単に見捨てられるのか。

……わかりたくも、ない……。

「——くつ、ダメです……なにか強い呪いが？ いえ、呪いの反応ではない？ これはいつたい……！」

「プリエステル嬢、出血が止まりません。このままでは——」

あたしは、ガルに近付き……跪いて、言う。

「――ガル、聞える？」

「……！ フィーリア様、お下がりください……この子は多分もう喋る事も……」

「……聞え、る……よ……お姉ちゃん……ん」

あたしは、涙を堪えながら、続けて言う。

「あたしはね、実は……魔王の娘だったの」

「魔王……の？　へ、え……やっぱり……お姉ちゃん、は……凄
い……なあ」

ポタポタと落ちていく、あたしの涙。ガルの血だらけになっている頬に、滴り落ちていく。

ガルは、呟いた。

「あれ……？ 雨、が……降って、るん……だね」

「っ……うん。ちょこつとね」

「そつ、かあ……。お父、さんと……お母さん……だい、じよぶ
かな……」

——自分の命が消え掛けている時に、何故この子は人の事を心配
しているというのか。何故非情な人間が溢れかえる土地で……こんな
純粋な子が、死にそうになっているというのか。

人も、世も、すべてが無情すぎる。

「あのね……ガル」

「……うん……？」

「ガルは多分、もう……生きられないかもしれない」

「!? フィーリア様!」

「——ガル。生きたい?」

あたしはプリエステルの言葉を無視して、ガルに問う。

「……う、ん……生きたい……よ……」

「……方法は一つだけ、あるんだ」

「えへ、へ……知ってる、よ? 使い魔……だよ、ね……」

「!」

「ぼく……いっぱいべんきよ、したんだあ……」

あたしは、我慢さえも忘れて——ただ泣いた。

——使い魔。それは魔族が、同じ魔族を従える……召喚の術のよ
うなもの。契約をした仕える側の魔族は、その時点で成長を止め…

…契約者が死ぬまで、絶対に死ぬ事はできないと言う。しかも契約者の魔力の力に比例し、身に着く力は違う。ガルはハーフだが、曲がりなりにも“夢魔”の子——夢魔は昔から、使い魔として適任な人材だ。人間の血が入っていると、抵抗は薄いだろう。

あたしは——今度こそ、涙を拭いた。

「——ガル。うん、ガルガント」

「……うん……お姉ちゃん」

「ガルガントには、その覚悟がある？」

……ガルは。

先ほども浮かべたような、気の抜ける笑いを浮かべた。

「え、へへ……。ある、よ……」

「……やり方は、わかる？」

「呪文……の、こと……？ うん……いつ、か……なってみたい」

なあって、思つて……覚え、たよ……」

あたしはそれを聞き、迷う事なく——自らの腕に切り傷を与えた。そして、傷だらけなガルの腕を……そつと握る。

「一緒に、ね」

「う、ん……」

あたしは瞼を閉じて、滑らかに、その呪文を唱えた。涙を流さないように、悲しみで声を震わせないように——必死に我慢をしながら。ただ、ひたすらと。

ねえ、父上。あたしはね……やっぱり、人間として生きていくのは——不可能なんじゃないかって思うの。だってね、人間ってホントにあり得ないんだもの。平気で同族を見捨てられるのよ？ 笑っちゃうよね。

……あたし、理解……できないよ。たとえ人間でも、あたしは子供だけは見捨てなかったと思う。なのに……人間は子供でも、魔族を平気に殺せちゃう。まるで、虫のように。

その違いは……何？ それは、ここで暮らしていたらわかることなのかな。あたし……わかりたくないな。

——長い長い、呪文のあと。

白い光に包まれたガルは……小さく瞬いて、あたしの胸の中へと収まっていった。途端に感じるのは、様々なガルの感情。

両親に対する心配、愛情、悲しみ——そして、人間へ対する……憎しみ。小さな身体で、ありとあらゆる感情を一纏めに使っていたガルの心は。今、あたしとともにある。

……大丈夫だよ、ガル。あたしが絶対に、二人を助けるから。

そう念じたら、心なしか——ガルがホッと笑った気がした。

「フィーリア様？ 今のは——？」

「フィーリアちゃん？」

「お姫様——」

「——フィーリイ？」

プリエステル、マリンベール、ロックハート、そして——勇者の
声。あたしはゆっくりと瞼を開き、降り注ぐ太陽を見つめて……言
った。

「愚かなる人間に、復讐を」

あたしは立ち上がり、歩き出した。——孤児院のある方角へと。
勇者がそれを、止める。

「フリーリィ！」

「——触るな。人間風情が」

「……！」

「あたしもどうかしていた……。お前らとわかりあおうなどと、
不可能だというのに」

そう、結局はわかり合えないのだ。何故ならあたし達は——人間と、魔族なのだから。

「フィーリイ、落ち着くんだ。俺達も行く」

「驕るな、人間。お前達無能に何ができる？ それとも今度はあたしを殺すつもりか、愚かな人間め」

「……！ 違う！ 聞くんた、フィーリイ！！」

「触るなといっただろう。——吐き気がする」

もう、止められない。

ガルから流れ出る、人間への激しい憎しみは——やがてあたしへと感化し、元からあったあたしの憎しみと同調し、そして溢れ出る止められやしない。止められないんだ。

あたしは、フィーリア・エンジェル・マールヴォロ・オコナム力。魔王の意志を受け継ぎし——魔族の子。人間と馴れ合うなど、許されない。

「——わかった。フィーリイ」

「勇者様！？　なにを言っておられるのですか！　フィーリア様、
落ち着——」

「プリエステル。……いいから」

勇者はプリエステルの言葉を遮り、あたしを見据えながら言った。

「フィーリイ」

「——なんだ？」

「…………お前の憎しみ、全部俺に当てる。その全て、俺が受け止める」

「ゆ、勇者！　アンタ何言ってるのよ！！」

「黙っててくれ、マリンベール。……さあ、お前の憎しみをよこせ」

あたしは、勇者を冷たい表情で見据える。

——魔族の掟。血縁や親しい者が辱められ、または命を落した場合。その者を……殺しても、いい。ならば勇者も……その対象者なわけだ。

ゆっくりと上がる右腕——あたしは、勇者へと伸ばした。

九

——伸ばして。伸ばした手を……あたしは、ためらわせた。あとちょっと伸ばし、その首を捻れば——勇者を殺せるというのに。あんなに殺したいと思っていた勇者に、好きにしろと言われたのに。

……何故、ためらう？

「——フィーリイ」

「っ……！」

「たしかに、俺も人間だ。魔族のように強い心は持っていない」

「……っ、喋るな……！」

「——だけど、フィーリイ。俺達はそれでも、生きている。こういう生き方で、自然と折り合いをつけてるんだ。人それぞれ……いろんな性格をしながら」

「黙れ……！」

「だから…… “人間” という括りでなく、“個人” を見てくれな
いか？ —— フィーリイ」

伸ばした手を掴まれて、ギュッと握られる。そしてその手は、その
のまま勇者の胸へ移動した。…… ドクンドクンと伝わる、鼓動。あ
たしやガルと変わらない—— 緩やかな、リズム。

「っ……うっ……」

「！ フィーリイ」

「あたしは……！ それでも、わからない！ 何故…… どうして、
大切な人を殺され、その殺した者を八つ裂きに殺してはいけないの
か！！ 何故だ！ 答える勇者！！」

規則正しく鼓動する、勇者の“命”。

何故彼らは—— 大事な人が殺されて、我慢ができる？ 何故我慢
をする必要がある？ 悔しくないのか？ 苦しくないのか？ 悲し
くないのか？ ちっぽけな存在のくせに、何故そこで我慢をする？

それほど、人間には“心”がないのか？——答える。答えてくれよ、勇者……。

「——憎しみは、怖い」

「……怖い？」

「ああ。自分のせいで憎しみに囚われ、歯向かったとして……その人はもしかしたら、死んでしまいかもしれない」

俺は、それが一番怖い——そう呟く勇者の心臓は、少し不規則に振動していた。それが、“怖い”という意味。

「憎しみのあとに残るのは、絶望だ。それを果たすまでは生きる希望があっても、その後にはなにもない」

「——なに、も」

「そう。……なにも」

それが、人間の考え——いや。“勇者の”、考えなのか。

そうか……勇者という人間は、“その後”を考えるのか。“今”ではなく、“続き”を——。

その答えに衝撃を受けるあたし。

……考えてもみなかった。人間は短い命の中、そういう結論に辿り着くのか。短いからこそ“これから”のために、“我慢”をする。そういう……ことなのか。

あたしも、一応は人間だ。寿命は奴等と変わらない。だけど魔族として育って来たあたしには——考えられない事。そんな導き方が、あつただなんて。

そうか……これが父上の言っていた、“人間は面白い”という意味か。たしかに——面白い、な。

——ガクリと膝をつくあたしに、勇者がそつと近寄った。頬に伸ばされた手を払う事もできないあたしは……ただ静かに、涙を流した。

そして、ポツリと呟く。

「それでもやっぱり……憎いよ……殺してやりたい……」

「……うん」

「どこに持っていけばいい？ ……消えてくれないんだ」

勇者は、頬を撫でる手を……ゆっくりと頭に持っていく。

「消さなくていいんだ。胸に刻んで、一生忘れるな。そして沢山刻んだら、殺す以外の方法を探そう」

「……殺す、以外の……？」

「そうだ。死んだらそれで終わり、後悔や恐怖に苦しんで、改めさせる事ができない。……どうすれば奴等がコッテリ反省するのか、一緒に考えよう」

そう言って――勇者は。

あたしに、手を差し延べた。

「復讐をするとは言わない。“命”を奪わない復讐をするんだ」

「命を……奪わない、復讐」

「そう。後悔させなきゃ、意味がない」

勇者はそう言って……少し意地の悪そうな笑みを浮かべた。あたしはそれを見て、クスリと笑う。

……オイオイ。まったく、勇者がそんな悪役みたいなこと言っているのかよ。ああ、そうだった。勇者は世界一勇者らしくない人、だったっけ。

——あたしは差し延べられた手を掴んで、立ち上がった。うん、父上、あたし決めたよ。“人間”を許すんじゃないかって……まずは、知ろうと思う。そして人間を、じゃなくて——“勇者”を。少しずつになりそうだけど……頑張ってみるよ。

ごめんねガル。こんな勝手な主人で。……許してくれる？

——ガルが言った。

「フィーリアお姉ちゃんと僕は、一心同体だから。僕も同じ気持ちだよ」……と。

世界は眩しい。

きつと、近い未来——また今日みたいな日が来るのだろう。それでもきつと、今みたいに勇者があたしを説得してくれる。あたしは、そんな勇者に賭けてみようと思う。憎しみを無くすことは出来なくても、少しの間……“忘れ”られるように。頑張ってみようと思う。

眩しい朝日を身体中に吸収したあたしは——気合いを入れるため、自らの頬をぱちんつと両手で叩く。さあ、こうしちゃいられない。早く、ガルの両親の元へ行かなくちゃ！！

あたしはくるりと背を向けて、勇者に言った。

「ほら、ちんたらしてないで行こう！ ガルの両親助けなくちゃ
！——」

「ふ——ああ、そうだな」

——あたし達は、走った。目指すはもちろんあの孤児院。待ってね、今、必ず助けにいくから！！

あたしは、勇者と一行とともに、森の奥深くにある孤児院へ——
急いで向かうのだった。

——深い森の中。

あたしと勇者、マリンベール、ロックハート、黄金野郎、プリエ
ステル、哀れ女は……ひたすら休まずに、孤児院を目指していた。
最初、戦闘要員以外を連れて行くのは——という意見も出ていたよ
うだが、「怪我人がいるかもしれない」との勇者の言葉により、結
局全員で行くことになったあたし達。

父上の力が段々馴染んで来た今——あたしの体力は、ある意味底
無しとなっている。足の筋力も格段に上がっているので、その気に
なれば一人で先に向かえそうだ。

——父上が、こんなに凄いとは思わなかったが……、それを追い
詰めた勇者は、どれだけ凄いのだろうか？ 想像すらもはばかられ
る。

あたしは一人勇者に恐怖を抱きながらも、やはり凄い奴だと心中
笑ってしまった。やはり勇者とは、こうでなくちゃ。

ひたすら走る中——その勇者の背を見つめ、しんみりと思う。

そんな勇者が何故か突如立ち止まり、行った。

「来るぞ!!」

素早く反応したあたり達。マリンベールは勇者の右横へ——黄金野郎は左横へ行き、援護を。ロックハートは後方支援の二人を守る態勢に入った。しかし先に“ソレ”に気付いたあたりは、叫ぶ。

「戦わなくていい! ソレはあたり達を敵にしないから、ワキに避けてれば問題ない!!」

その言葉に反応した勇者達は——すぐさまワキに避け、迫り来る巨大なモンスターを顔面蒼白で見送った。

……今のはデカイ。戦っていたら、多分無駄に時間が掛かっていただろう。すぐに反応をしてくれる連中でよかった。

再び難なく走り出す最中——不思議そうに、プリエステルが質問してくる。

「何故、わたくし達を狙ってないとおわかりに？」

「え？ だってモンスターは、自分を生み出した親を殺すためだけに生まれたんだから。当然でしょ？」

「親——？」

勇者が聞き返す。

その反応に、あたしはもしや——と勘ぐった。いやでも、まさか。モンスターの出生を知らないなんて……そんなわけがないよね？
いくらなんでも、自分達がその“原因”なのだから——。

しかし、その思惑は正しかったようで……。未だ不思議そうにするプリエステルのかわりに、ロックハートが問い掛けてきた。

「お姫様、いったいどういう——？ 親とはいっ——」

「……え？ 貴女はエルフ族でしょ？ いくらなんでも貴女は知ってるはず——」

「……申し訳ない。私は、人間に育てられたんだ」

人間に……そうだったのか。いやでも、これは人間も知ってるものだとばかり――。

とりあえず、人間がモンスターにたいして持っている知識とはどういうものなのか、あたしはそれを知るため――まずはそれを聞き返した。

それに、哀れ女が答える。

「モンスターって言ったらあ、アンタら魔族が生み出して人間を襲うように仕組んだんでしょ？ それ以外になにがあんのよ！」

「――お前ら人間は、それを真面目に思っていたのか？ ……そこまで無知とは思わなかった。どうしてトコトン馬鹿なんだ」

「なんですってえ！？」

どうどう、と。哀れ女の横でロックハートがなだめた。

素直にその馬鹿さ加減に感心してしまったあたしは、なんだか無性に疲れてしまい、ポロリと口にする。

「はあ……。人間って凄いな……」

「……、まあ、人間は短命だからな。知らされる知識なんて魔族ほどない、と言う事だろう。フィーリィ、教えてくれ」

勇者のその言葉を咀嚼し——そして、反芻する。人間は短命……だから知らされる事が少なくて、多分、知らされても曖昧になる。そついうことなのかな。

……溜め息を吐いたあたしは、諦めたように説明を始めた。

「——モンスターは、魔族が作り出した物じゃない。人間が作り出した物だ」

「えええっ！？ 人間！？」

マリンベールが、驚きに叫ぶ。

「そう、人間。モンスターの根源——それは、人間から生まれた負の感情。妬み、憎しみ、悲しみ、怒り……様々なものだ。魔族にももちろんある、でもそれは割り切ったものだからすぐ切って捨てれるんだ——でも、人間はそうもいかない」

あたしの説明を聞く勇者達は、皆呆然としていた。本当に予想外だったのだろうか——そんなところにまた、呆れてしまう。

モンスターの出生、それは人の骨だけとなった屍に——負の感情がこびりつき、やがて借り物の命を得てしまうことから始まる。そして、そのモンスターになってしまった屍は……借り物の心——つまり負の感情を元に、産みの親を襲いにいくのである。

「何故、こんな醜い姿で生み出したのだ」……と。

「だからモンスターは、下手に刺激さえしなきゃ……襲って来たりしない。アイツらが殺したくて堪えないのは、産みの親——ただ一人なんだから」

……まさかそれを、“原因”である人間が知らないとは思ってもみなかった。あたしもそうだし、多分父上も……てつきり知っていると、そう思っていただろう。そりゃ思うはずがない——自分の責任なのだから。

まさか、魔族に責任転嫁されているとは。……うん、面白いよ。多分。

……しかし、それを信じる事が出来なかったのだろう。哀れ女が、までもや哀れ発言をする。

「そ——そんな嘘よ！ ハッターだわ！」

「……はあ。じゃあ、アンタの説明によるとモンスターは人間を“見境なく”襲うらしいけど。さっきのモンスターはなんだったの？」

「そつ……それは」

言葉に詰まる哀れ女——ジュエリー。あたしは溜め息をみたび吐

いた。

「ほら、出ない。……モンスターの姿形の禍々しさ、あれが人間の“心”の表れだ。そしてモンスターになった“元人間”は、醜く親に襲いかかる」

お似合いじゃないか、と。あたしはそう吐き捨てた。

だから、あたしは何度も言ったのだ——“人間は、同族同士で殺し合いをする”……と。モンスターも名前が違っただけで、元は人間。それを醜いから化物だと言って、人間は打倒す。それが自分達の“表れ”だと気付かずに……醜いのはどっちだ、ってね。

あたしは溜め息さえも吐くのが億劫になるほど、精神的に疲れてしまった。

「勇者が言った通り——人間には人間の、“我慢”に美学があるんだと思う。でもそんな我慢の先にあるのが……モンスターだ」

「……」

「ただの我慢だけで済むならいい——それを、募り募って“悪意”に持っていけないようにさえすれば。……モンスターは言い換えたら、“悪意”の塊なんだよ」

それが——モンスターの正体。それを聞いた勇者達は、しばらく黙り込んでいた。あたしは走りながらも、その沈黙を静かに受け取る。

……勇者があたしの、人間に対する憎しみに——考える時間を与えてくれたように、あたしも待つてやろうじゃないか。それがあたしに出来る、勇者への……恩返し？　みたいなやつかな。

——しばらく沈黙したのち。

不意に、黄金野郎が口を開く。飄々とした雰囲気はなく——至極、真剣に。

「魔族はそれを……いつから知っていた？　君はそれをいつ知ったんだい？」

「いつから？　……さあ。当たり前のように知ってたから、正確

には覚えてないけど」

そう、勝手に染み込む——普通一般常識のように。あたしはそれを、最初から知っていた。それが……当たり前のことだったから。

だから、人間がまさか知らないとは……。今さっき知った新事実に、勇者達だけでなくあたしも呆然としてしまった。父上もし生きてて、今を知ったら……多分タレ目がタレ目じゃなくなるほど見開いて、「そんなバナナ」とか呟くのだろう。

……あ、そんなバナナとは、異世界に伝わる“ダジャレ”というもので、ちょっとしたギャグみたいなものらしい。何故バナナなのかは知らないが、聞くところによると基本的ダジャレとは年齢が上になってきた者しか使えない、高等ギャグとかで——笑えるか笑えないかの瀬戸際を楽しむ、非常にシニールなギャグだという。これで笑いがとれたら、その日絶対にいい事が起きるんだとか。父上はしょっちゅう試していたが、あまりにしつこかったので大臣がキレたりしてそれはもう大惨事に——って、そんな話はどうでもいいんだ。

心の中でクスクス笑うガルに気付いたあたしは、今は孤児院に向かう事を考えなければ……と気持ちをすりかえた。

フルフルと頭を降って、父上の生み出した様々なダジャレを外に追い出す——中毒性があつてなかなか離れないため、あたしは自分と小さな戦いに励んだ。ちよっ、ガル、今の「シニールにならないようにしゅるんです」はなかなか可愛かったぞ！ 父上よりも上出

来じゃないか！！

そんな、真剣味の足りなくなってくるあたしとガルの横では——
かなり真面目な表情をして、勇者とプリエステルが会話をしていた。

「王国に帰ったら——それを伝えねばな」

「わたくしも一緒に伝えれば、きっと信じてくれるでしょう。しかし驚きですね……モンスター出生にそんな内容があったとは」

「ああ。……これも、フィーリイのおかげだ」

名前を呼ばれてハツとする。……いかんいかん、いつまでも永遠にふざけるわけにはいかない。しっかりしろ、あたし。

「まだまだ人間が知らない不始末がありそうだ——これからも、度々教えてくれるか？」

「え？ ああ、うん、まあ……聞いてくれなきゃあたしもわからないけれど」

人間が何を知ってて、何を知らないかなんてわからないし。あたしはそう呟いて、肩をすくめた。

その代わりに今度、人間界でオススメの食べ物を教えてもらおうか。魔王城での料理もちろんうまかったのだが……基本的にあたしは、人間界の食べ物も食べてみたいと思っていた。ちなみに魔王城の料理は、父上の好みで毎回“和食”というものだった。母直伝なんだそう。

あたしも作れるのが“和食”だけなので、やはり一応女としては他の料理も勉強しておきたい。人間界は基本“洋食”と聞くけれど、いったいどういうものが洋食なのだろう。……え？ ガル、なんで驚いてるの。“和食”とは何、って？ 人間界にはないの？ うそ、あると思ってたのに！

「——そろそろだ。みんな、隊列を組め」

勇者の指示するような声。気持ちをきりかえたあたしは、口をキョツと一文字にした。……ガル、準備はいい？ 殺さずに復讐、頑張ろうね。

先頭に勇者。その真後ろにはあたしがいて、あたしの両横には——マリンベールと黄金野郎が。その後ろには、ロックハートに守られる後方支援の二人。キッチリと組まれた、完璧な隊列。

あたし達は森を抜け——とうとう、孤児院へ躍り出た。そこで見たものとは……………。

「……………ひ……………ど、い……………」

小さな声で呟く、マリンベール。……………そうか、彼女は孤児院育ちだと言っていたか。それならば、この中でかなりダメージを受けているといっても過言ではないだろう。

あたしは面影すらもなくなった、孤児院の——跡地を見つめて。一人呆然と涙を流した。

十（後書き）

ダジャレは高等ギャグなのです。

それを教えたのはもちろんフィーリアの母（笑）

孤児院があつた場所に呆然と佇む、あたし、そして勇者達。目の疑う光景に何の言葉も出ないあたしは——ただひたすら、この惨事について考えた。

これは……どういうこと？　ねえ、ガル——ここから逃げて来た時、すでにこうだったの？

——その言葉を受け取ったガルは、突如目の前に姿を表した。小さな光に包まれて、あたしは初召喚を果たす。いきなり現れた傷だらけだったはずの少年に驚いた勇者達は、咄嗟に戦闘体制に入った。

あたしはそれを「大丈夫」と阻止し、目線が合うように屈む。

「ガル——」

「うん、話すね」

ガルは、今までであったことを——たどたどしく話した。

朝方、大きな物音で眠りから覚めたガル。横にあたしがいないのに気付いて下に降りたのだが——そこにいたのは、何者かに捕らえられている両親。二人が自分のために頑張っていることを知っていたガルは、すぐさま飛び出したらしい。しかし大人と子供では力に差がありすぎて、ガルは一度そこで気を失ってしまった——起きた時には、自分は外にいて、孤児院はこうなってしまうていたんだとか。

両親は自分の横で悪者に見張られながらグッタリしていたが、ガルが気付くとわかりすぐさま言った——「ガル、お前だけでも逃げなさい」、と。即座に首を横に振ったガルだったが、ギルヴェールさんの魔法により……ガルはあの精霊のいた泉へ飛ばされてしまった。

精霊に助けを求めたガル。だが精霊はどちらの味方もしないというのを知らなくて——そうしている間に、数人の悪者に囲まれてしまったんだとか。しかし、ガルはこれでも夢魔とのハーフ。目の前には湖があり、自分は水の属性——なんとか抵抗はしたものの、無傷では勝てなかったらしい。

でも、今こんなところで弱っている場合じゃない。ガルはいつの日か、二人を本当の“お母さん”と“お父さん”と呼ぶために——この状況をなんとかしなければ、と考える。そして出た行動は……町の人に、助けを求める事だった。

「僕ね……町の人達に、嫌われてるのは……知ってたんだ」

「……ガル」

「でも、きつと助けを求めれば……手助けしてくれると思ってて」

「……」

「でも、やっぱり嫌われ者だったみたい」

えへへ、と。今にも泣きそうな顔をして笑うガルが——そこにはいた。

「あ——でもね、今はそれでよかったって思うんだ」

「……え？」

「だって、フィーリアお姉ちゃんに会えたんだもん！……フィーリアお姉ちゃんだけが僕に声をかけてくれた。それに、小さな夢も叶えてくれた」

——小さな、夢。

それはガルと同調していたあたしだから……わかる事。ガルは、いずれ使い魔になってみたいと思つてたんだもんね？ 使い魔になるか聞いた時も、たしかそう言っていた。

なんて優しい子なんだろうか。きっとガルは、あたしがガルを“使い魔なんかにしてしまった”と感じているから……わざわざそう言ってくれたんだよね。まったく、そこまで優しくしなくてもいいってば。

あたしはガルを撫でて、これからの事を考えた。

——少し前までは、たしかにここにガルの両親がいたはず。ならば、いったいどこに連れていかれたのだろうか？ 並外れた嗅覚で匂いを追いたかったが、残念ながら——魔法ではないなにかで破壊された孤児院からは、酷い匂いが立ち込めていた。これでは嗅覚が使えない。

くそ、鼻のつく匂いだ。しかしどうやら、人の焼ける匂いだけはないことからして……孤児院にいた全員は、連れて行かれたと考えていいだろう。少し、ホッとした。

あたしは孤児院を眺め回しながら——何かないか、と思索した。奴等はどちらへ向かった？ 国に戻ったか？ いや、でもここからドウルーダムは遠いと勇者に後から聞いたし——ならいったい、何処へ？

そんな時だった。

勇者が唐突に、「モンスターだ」と言ったのは。そんな気配がなかったので驚いたあたしは、ガルを抱き締めて逃げる準備に入った。しかし、いっこうに現れない。疑問符を浮かべるあたし達。

そんな様子のあたし達を見てか、勇者は気付いたように「すまない、そういうことじゃないんだ」と言った。……じゃあどういうことだ？ 視線で問うあたしに、勇者は先ほど説明したモンスターの話を蒸し返し始めた。

「モンスターは、負の感情——“悪意”から生まれるんだっただな」

「え——うん、そうだけど」

「じゃあ……これだけの大惨事が起こったんだ。さっきのモンスター、もしかしてついさっき生まれたんじゃないか？」

続けて、勇者が問い掛ける。

「モンスターが生まれる瞬間というのは、いったいどんな時だ？」

「……！ 戦争とか、命が多く……奪われた時。それも卑怯な手を使って、恨みを買うと——なおさら」

……そう、つまりは。

“恨み”を強く感じたら——モンスターは生まれる、ということ。さっきのモンスターはデカかった……きつと、様々な人間の小さな恨みが募り悪意となって——生まれたのだ。生み出したのは多分……子供や、敵の大人達。

——あたし達は身を翻した。もちろん向かうのは、先ほど出会ったモンスターの向かっていた方角。

ガルを胸に抱いたまま、あたしは我先にと走る。人間の子供が生み出したモンスターほど——怖い物はない。純粹だからこそ……正直なんだ。早くしなければ、人間の言うモンスターのように“見境なく”なってしまう——！！

「勇者あツ！ 時間がない！ あたしはガルと一緒に先に行く！」

「——！ 待て！ それならせめて——ロックハート、お前ならフィーリイの足についていけるな！？」

「ええ！」

「フイーリイ！ ロックハートと先に行け！！」

あたしは頷いて、走るスピードを早めた。ロックハートはその後ろで、しっかりついてくる。

「急ぎましょう、お姫様！」

「もちろん——！！」

願いを込めながら——あたしとガル、そしてロックハートは……モンスターの向かっていたであろう道のりを走る。

簡単に引き離されていく、勇者達——だが今はなんとしても、ドウルダムの中に追いつかなくては。

——ガルを抱えているあたしの横。ピッタリとついてきているロックハートが、不意にあたしへ問い掛けてきた。

「お姫様、貴女は戦闘要員とみて大丈夫かな」

「もちろん——！」

「お姫様の戦闘体型は魔法でよかったね、属性は？」

「あたしに属性はない。でも、今はガルのぶんの力がかさ増しされてるから——水系が一番得意かも」

「オーケー。なら、私と相性はピッタリだ。私は雷だよ」

「——！ たしかにピッタリ」

あたし達は互いの得意な魔法、体術を教え合い、これから起こるだろう戦いのため——気を引き締めた。

……ドウル・ダムの目的、それは間違いなくガルなんだろう。ならば、ガルは隠して置くべきだろうか？ もう一度あたしの中に戻ってもらって——いやでも、ふとガルを再び召喚した時、使い魔になったと知れたら……かなり面倒だ。間違いなく、あたしまで標的にされてしまう。そしたら勇者達にまで迷惑がかかる。

それに……。

「——お姉ちゃん、僕、自分で言うよ？ ……お母さんとお父さんに」

「ガル……」

「僕はもう人間として暮らせないし、成長も出来ないけど……でもまだ生きられる」

……でも、きっと二人は悲しむのだろう。大事な息子が使い魔として、一生を拘束されるだなんて。あたし、二人に顔向け出来ないよ。

ガルを抱える腕に、少し力を込めながら——あたしは二人への罪悪感が募った。使い魔なんて、魔族にはあんまり良い印象がないからね……。主人の命令は絶対服従だし、だからと言って主人が死ぬまで命は拘束されるし、なにより成長出来ないし。子供のガルは……精神は成長しても、このままとなってしまう。

少し、見てみたかったな。……大人になった、夢魔として少しエロくなるガルを。

……。

残念な性格だな、あたし。

「……………！ お姫様」

「？ なに？」

「見えるかな？ ここから数十キロ先で、先ほどのモンスターが……黒装束の者達と戦っているのを」

それを聞いたあたしは、すぐさま注意してそちらを伺った。見えるのは……ぼんやりと浮かぶ数人の、大きな影。いくら視力は上ったとはいえ……やはりエルフには敵うまい。「若干」と答えるあたしに反応したロックハートは、詳しく説明をしてくれた。

どうやらロックハートによると、その黒装束の奴等は馬車を背にして戦っているらしい。その馬車から覗いた人影には、数人の子供と傷だらけになった二人の成人男女がいると——多分間違はなく、ギルヴェールさん達だろう。

見つけた、とほくそ笑むあたし……しかしロックハートの言った次の言葉により、あたしはその笑みを凍らしてしまった。

「なっ——！」

「えっ？ い……いきなりなに——」

「い……今、黒装束の奴等の一人が……」

「……うん？」

「……………モンスターの打ち出した“魔法”により……………死亡した」

は？ と、声にもならない声を、あたしはあげた。

——魔法？ そんな馬鹿な……それはあり得ない。今の反応からしてロックハートも知っていると思うのだが、モンスターとは……“魔法”を扱えないのだ。あるのは“負の感情”だけで、“知能”はないから。

魔法とは知能から生み出される、高貴なる技。……モンスターに操れるわけがない。多分、火を吹いたかなにかだろう——それをロックハートは見間違えたのだ。

あたしはそう結論づけたのだが、ロックハートは始終困惑顔——それを横目で見ていたあたしは、一つの、“あり得ない”仮説を思い付いた。

「いや……………でも、まさか」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「？ ……お姫様？」

「……いや、あり得ない……まさかそんなことが……」

二人の声も届かぬほど、あたしはその“仮説”にのめり込んだ。

ソレは、あたしが今まで思ってた来ていた……“常識”を覆すもので、でも、モンスターが魔法使ったというのがもし本当ならば——辻褄が合ってしまうのだ。とても信じられない仮説……あたしはそれを確かな物にするため、ロックハートへと声をかけた。

「ねえ、人間に育てられたとしても、エルフなんですよ？ 黒い靄みたいなの、見たことない？」

「黒い靄——？ それは心臓辺りから溢れ出る……線状の、羽ペンほど大きさのやつかな」

「……うーん。あたしは魔力が桁外れでも、一応人間でハッキリとは見えた事ないから……形状や大きさはわからないんだけど。うん、多分それ」

人間から出る、黒い霧——あたしにはうすばんやりとしか見えな
いのだが、普通人間以外の生物にはそれがハッキリ見えているとい
う。人間でも見える人っていうのは、多分異世界人ぐらいだと父上
が言っていた。

そしてもし……それが人間から出ているのを見た時。「その人は
かつて恨みを買うような悪事を働いた者が、相当卑劣な悪意により
どん底になってしまった恨み募った者だろう。絶対近付いては、い
けないよ」——と、よく言われていた。

つまり、モンスターを生み出す事となった親……なのだろう。そ
りやお近付きにならないほうがいいわけだ。だってとばっちり食ら
うもの。

それをロックハートに説明したあたしは、「今、一番濃霧は、誰
に見えていますか？」と問う。

ロックハートは言った。

「黒装束の奴等だね。あと薄く、子供達にも……」

「……なんだ。じゃあ思い過ごしか」

ふう、と。

あたしは安堵の溜め息を吐いて——「あと」と言葉を続けるロックハートの、次に紡ぎだされた言葉に……耳を疑った。

「——傷だらけの、成人男性からも出ているね。しかもやけにハッキリ、誰よりも濃い」

「……………ま、じ……………で？」

ロックハートは、こくと頷いた。

——魔族が、モンスターを生み出す事は、絶対あり得ない。いや、絶対ではないけれど……もし生み出したとしたら、前代未聞の事態だろう。

魔族は人間のような悪意は持たず、感情に正直だ。人間から恨みは買うかもしれないが、“魔族”が生み出す事だけは絶対になかった……はず、 فقط。

もし魔族が……人間を共に住み、その心に“感化”されていたと

したら？ ……魔族がモンスターを生み出す事はない、本当にそれが言えるのだろうか。

……確証はない、でも可能性はある。父上が以前教えてくれた事だ——世界に生きている生物は皆可能性を秘めている、と。

異世界には、物理学者という人達がいるらしい。そのとある物理学者は……シュレーディンガーと言って、ある“可能性”という言葉葉を導き出した。

それが、シュレーディンガーの猫。というもの。

それは物理学というより、哲学？ というものとも呼ばれているらしいのだが……。異世界の理屈はわからない。とにかく頭のいい人間が生み出した話。

まず、蓋付の箱がある。その箱に猫を閉じ込めてから、なんと毒ガスも箱の中に充満させるのだが——普通、その箱に閉じ込められた猫は死んでいると思うだろう。だが、何かが起こり生きてるかもしれない。

生きてると思えばその猫は生きているし、死んでいればその猫は死んでいる。それが……。シュレーディンガーの猫。頭のいい人間が導き出した、答えだ。

本当はもっと複雑な内容だったのだが……。要はこんな感じだったはず。あたしが言いたかったのは、“可能性とはありとあらゆるものを秘めている”、ということ。

父上はそれを語りながら、「私はあり得ないという言葉信じれなくなった」と言っていた。そう、だから……あり得ないということ自体、あり得ないのだ。

——あたしは過去を思い返ししながら、浮かんでいた“あり得ない仮説”を……信じるしかなかった。

十一（後書き）

シュレーディンガーの猫、詳しく解説……というか正しい説明。

蓋のある箱を用意してその中に猫を一匹入れ、箱の中には猫の他に放射性物質のラジウムを一定量と、ガイガーカウンターを一台、青酸ガスの発生装置を一台一緒に入れる。

もし箱の中にあるラジウムがアルファ粒子を出すと、これをガイガーカウンターが感知して、その先についた青酸ガスの発生装置が作動し青酸ガスを吸った猫は死んでしまう。

でも、ラジウムからアルファ粒子が出なければ、青酸ガスの発生装置は作動せず猫は生き残る。

一定時間経過した後、猫の生死は？ ……というのが、シュレーディンガーの猫です。

たしか合ってるはず……間違ってたらごめんなさい。

猫好きな人にはちよつと酷い話ですね。つまり私もかなりダメージを受けました……orz

しかも最初シュレーディンガーでなく、シューリンガーと言い間違えたりしました……ああ恥ずかしい。

十二（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。嬉しくてテンションな
ぎ登りになってまいりました！

ドンドン更新していきますので、読みにくいとは思いますがよろ
しく願っています！

「……魔族がモンスターを生み出した。前代未聞どころか、新境地すぎる」

あたしはそう呟いて、頭を悩ませる。

魔族の影響を強く受けたモンスターは、多分それなりに知能も受け継いだのだろう。魔法も扱えるわけだ。……どうしようか。これはかなり厄介だ。

まったくギルヴェールさん——人間の夢魔の初子供誕生だけでなく、魔族の初モンスター誕生までやってしまうとは。アンタ、ホント伝説として語り継がれるよ！ この大バカ！

パニックになるあたしの横で、ロックハートさんもだいたい事態を飲み込めたのだろう。困惑顔のまま、あたしに疑問を投げ掛けてきた。

「お姫様、そんなに問題なのかな？ たしかにモンスターが魔法を扱えるのは凄いけど」

「……問題も問題、大問題だよ。っていうか問題外」

あたしは言った。

人間が生み出したモンスターは、たしかに魔法が扱えない——かわりに強大な属性の力を秘めているせいで、ものによっては……まあ火を吹いたりとするわけで。知能がないから歯向かえば大きな被害が出るし、気性が荒いから手が付けられない……たしかにどちらにしても厄介だった。

でも、魔族が生み出してしまった場合。

……モンスターは少量の知識を得てしまっただろうし、なにより“考える力”があるわけだから、それはズル賢さとかも含まれるわけで。普通のモンスターを相手にしてる時と同じように戦ったら、確実に大目玉を食らう。

人間のように魔法を扱うための媒体や呪文は必要ないし、なににより身体的能力も大幅にアップ。つまりそれに余計な知識があるのだ——怪我無しで望むのは、無謀すぎる。

しかも、今は“魔族”の力だけじゃない。人間の子供達の純粹な悪意と、人間の大人の奥深い悪意——今はそれも混ざり合っている。あれを放っておいたら……いずれ、一つの町を容易く滅ぼしてしまうだろう。

それを掻い摘まんで説明したあと、ようやく本当に今の深刻さを理解したのだろう——ロックハートは青ざめながら、「勇者達を待った方が」と言い出した。

……確かに、来るのを待ちたい。でも。

「——その間に、間違いなく子供達は」

死んでる。
そう呟いた。

「……待つのも無理、勝つのも無理。いったいどうすれば……」

頭を悩ませるロックハートは、腰にある刀を強く握り締めていた。

あたしはそれを見て、一言。

「勝つなんて誰が言ったの？」

「……え？　しかし……」

「ボーツと待つんじゃないで、戦いながら待ってればいいでしょ。
……勇者達が来るまで、持てばいい」

「……もちろん、それも簡単じゃないのはわかっている。それでも
やらなくては、皆の命が危ないんだ。」

同族の尻拭いは、魔王の娘が片付ける——こうやったら、一人で
勝つように臨んでやるさ。」

そう言って苦笑するあたしを見てか、ロックハートは……関心し
たようにほほ笑んだ。

「……お姫様は、強いね」

「そう？　まあ……責任感ほたしかに強いとは思っけど」

「いや、責任感だけじゃない。心も強いよ。……私は戦いとなる

と、どうもね。だからいつも後方支援の護衛をしてるんだ」

そう呟くロックハートは、たしかに何かに恐れているように見えた。

心が強い、か。……そうなのかな？

「！ お姉ちゃん、見えて来たよ！！」

「——！！ うん……やろつ。ガルは、馬車にいる皆を頼むよ」

「うん！」

「いくよ——ちゃんと戦ってね、ロックハート！」

あたしは初めて、口に出して……仲間の名を呼んだ。

「——！ ええ、もちろん」

父上……見てね。

あたし、絶対人間達と馴染んで見せるから。だからそのために――戦うよ。

“魔族”の心を忘れずに――“人間”になってみせる！！

「――いっけえええっ！！」

あたし達は、戦場へ躍り出る。

木に燃えうつる炎に熱され、吹き荒れる暖かい風を感じながら――。

――あたしはガルを後ろに離れた。ガルはすぐさま木陰に隠れ、モンスターに見つからないように大回りしながら、馬車へと向かう。それを確認してからあたしはモンスターへと視線を移す。

……黒装束の奴等は、突如現れたあたし達に気付いて、苦い顔をした。いや、あたしを見て——か？　どうやらあたしの存在を知っているっぽいな……なんで知ってるのかあとで締め上げて、詳細を聞き出さねば。

「ロックハート！　いつどんなタイミングでこいつが魔法を使うかわからない——大気の流れに気をつけて！　こいつは風と火を扱う——！」

「承知した！」

最悪のコンボだ……風と火だなんて。せめてそこは、ギルヴェー
ルさんと同じ水だけの属性であってほしかった。この二つの属性は
どこから来たんだ？　……わからない。前例がないだけに、理解し
きれない。いったいどんな作用があるのか。

あたしは同じく風の魔法を操りながら、モンスターの同じく風を
操るのを防いだ。せめて風だけでも扱えないようにしないと——い
つ炎を合わせて、周りに広げるかわからない。

時たまに水の魔法で応戦して、あたしはモンスターの注意を引い
た。今だけは黒装束の奴等と手を組まねばならんだろう——奴等
もそれがわかっていのか、うまい具合に援護に回りはじめる。

ああ——勇者、早く来い！　モタモタしていると裏切るぞ！！

「くっ——う、わああっ！！」

その時だった。

三人いたはずの黒装束の一人——大柄な男が、突如悲鳴を上げて倒れこんだ。そしてそのまま痙攣をして……動かなくなる。

——モンスターにやられた？　……でも確実に火ではいし、風も防いでいる——ならば今、モンスターは“なに”をした？　いきなりだったので、あたしはまったくそちらを見ていなかった。

奴——モンスターから感じ取れる属性は、火と風だけ。風は間違いないく防いでる。ならば火で、なにかをしたのだろうか。……しかし、燃やし尽くすだけの“火”で、いったいなにができるんだ。痕跡も焼痕もなく、どうやって。

「お姫様！　避けてっ！！」

「！？」

あたしは咄嗟に身をひるがえす。途端の事だったがなんとか避けたあたしは、ドクリドクリと波打つ心臓を押さえ付けた。

……あたしがさっきまで居た場所。そこには、綺麗に咲き誇っていたはずの花があったのに——今ではなぜかしおらしく、萎びていた。

「っ……」

ロックハートがもう少し遅く気付いていたら、あたしは多分……あの花のようになっていたのだろう。なんて、恐ろしいんだ。

「お姫様、水の魔法をモンスターに！ 雷だけではあの厚い皮膚に効かないようだ！」

「——わかった！」

何故燃えたのではなく、萎れたのだろっ……？ いや、考えるのはあとだ。今は言われた通り、水の魔法をモンスターに掛けなければ。

あたしは手を翳して、身体中にある魔力を——腕にためた。そして、放つ。

「水も滴る最悪^いモンスター——！」

瞬間、ザハアツと脳天から水を浴びる——巨大モンスター。瞬間
ロックハートが、電撃を打ち出した。

「乱舞せよ——古の神の聖なる雷^{いかすち}よ！ カウス、モネ、イ、シニ
——！」

——ゴロゴロと唸る、天空。先ほどまでは晴天だったはずの空は、ロックハートの唱えた魔法により、暗く、どんよりとした雲に覆われ……眩い雷がチラついていた。

瞬間、その雷は——モンスターに向かって、放たれる。

エルフの魔法——初めて見たのだが、やはり魔族と近いだけはある。威力がハンパなさすぎて、目をうすく開けているのがやっとだった。本当に神様がいたとしたら、こんな風に怒るのだろうか？……父上は魔王でよかった。いや、それでも父上の怒りも酷かったけど。

あたしは瞼をしっかり開いた——それだけ食らえば、少しは効いているはずだ。そう思っていた。

だが。

「——！ ロックハート！！」

あたしは叫び、風の魔法でロックハートを吹き飛ばした——。乱暴になってしまったが、対応は正しかったようだ……少しも食らってなかったモンスターは、気付いてないのか、ニヤリと意地の悪い顔で地面を繰り返し足踏みしていた。

……しかし、あたしが同時に使えるのは三つの属性まで。

同じ属性のものは同時に扱えないから……………。

——風が扱えるとわかったモンスター！。

ギリギリの瞬間あたしは空間を歪めて、来るであろう衝撃に備えた。

「グオオオオオオ！！」

凄まじい地響き——台風のように旋回する風——悪魔のように舞い上がる炎——。

空間を歪めただけでは防ぎ切れなかったのか、馬車は吹き飛び黒装束の奴等も飛ばされて、ロックハートまでもが木に打ち付けられ——気絶してしまった。

……今、意識を保ってるのは……あたしだけ。

「……！ち……父上……」

……父上なら、こういう時どうするんだ？ どうすれば生き残れる——どうすればやりすごせる。どうすれば、皆を助けられる？

あたしは必死に考えた。考えるんだ、あたし。奴は何故雷が効かなかった？ いくらなんでも、水を浴びながら雷を食らえば、麻痺くらいはするはず——何故平気なんだ。

——あたしは、ジリジリと後退する。モンスターはまるで喜んで
いるかのように……あたしへ、一歩一歩近付いて来た。

くそ、モンスターごときに遊ばれるとは。どうしたらいいんだ……！

——その時。

ふわりと空から舞う……無数の花びら。それは突如あらわれて、
まるであたしを守るかのように、身体に染み込んでいく。

それはとても、あたたかい魔力で——何故か脳内に、見たこと
もない女性の顔が浮かんた。

「……！」

あたしの中に入り、混ざり、溢れ出るソレ——。

わからない……わからないけれど、自然とあたしは——泣いていた。この人は……あたしがすごい会いたかった人、な気がする。無邪気に抱き付いて、頭を撫でてもらいたくなる——そんな感じがした。

——ああ、わかった。

この人は……あたしの、お母さんだ。

「……あ……あ」

震える身体。

熱くなる目頭。

滴る汗。

比喩の難しい——気持ち。

それがすべて重なりあって……、小さく鈴の音が頭に響く。自分の身体なのに自分の身体じゃないような感覚がして、でも気持ち悪さはなくて。

ぼんやりとする意識の中、あたしは呆然と呪文を吐いていた。

「イア……ヂ……アハラ……、キ……トン……ナ……サア……コ」

……知らない。

こんな呪文は聞いたことがない。でもたしかにあたしが喋っていた、これは強力な魔法だということを知っていた。

「エリシオ……モオワ……ラキトニア!!」

呪文を唱え終えたあたしは、ガクリと膝をついた。……誰かが、頭を撫でたような気がする。

——まわりが歪み始めた。ぐにやりとなる視界の中、モンスターはなんども叫びながら……魔法を放っている。しかしそれは誰にも当たらずに、全部自分に跳ね返っていく。

これは、現実ではない。幻を見せる魔法だ。モンスターはそれをわからずに、自らを傷つけている。そういう魔法なのだ。

「……なるほど」

自らを傷つけるモンスターを見て——あたしは、今になって奴が使っていた魔法に気が付いた。

奴が使っていたのは、火を応用した“熱”だ——その熱で水分を蒸発させ、干からびさせていた。花が萎れたのも、黒装束が倒れたのも……その、目に見えない“熱”に水分を取られてしまったから。

……まったく、ただそんだけだったただなんて。今気付くあたしもあつたよ。つか、このモンスターまじチートすぎ……普通そんなこと出来るかっての。

——自分で自分を死に追いやるモンスターは、やがて力尽きるようにその場に倒れた。じゅわじゅわと、その場から跡形もなくなっていく。

……ははは、勝ったし。

「あー……ねむ、い……」

さっきの魔法——いくら規格外な魔力があるあたしでも、相当奪われてしまったようだ。父上の専属執事がもしここにいたら、多分「昇天なさるなら跡形もなく消えてくださいね」とか言っただろう……ああ、アイツが死ぬ前に一度殴っておきたかった。

思い出すとなんだか腹がたって来たので、少し眠気が収まる。ふん、あんな奴でもたまには役に立つじゃないか。

ロックハートや馬車の中の子供達を伺おうとしたあたしは、ゆっくりと重い腰を上げて――。

「魔王の娘——その命、もらい受ける」

——いつの間にか気がついていたのか、それともフリをしていただけなのか。

目前に迫って来ていた黒装束の男は、その鋭い切っ先をあたしに向けて……振り下ろしていた。

……うそん。

そりゃないよ、アンタ。

銀色に輝く鋭い刃——それが振り下ろされるのを、あたしはただ呆然と見つめていた。まるでソレはスローモーションのように、ゆっくりと近付いてくる。

あとほんの少し……あたしに体力と魔力が残っていたら、よかったのに。

突如遠くなる視界に、背中走る痛み——あたしは苦痛に顔しかめた。……ああ、刃物って、こんなにジンワリする痛みだったのか。しかも何故か痛いのは背中だし……。

……？

背中？

——そんなあたしが、勇者に突き飛ばされて地面に背中を打ち付けたと気付いたのは……マリンベールに抱き起こされてからだった。

「貴様、ドウルーダムの王国お抱え研究員とやらだな——！」

「なっ！？ ゆ、勇者……………か？」

……銀色に輝く、サラリとした勇者の髪。雲から覗きだした太陽は、その勇者の白銀の髪を照らし——まるで、どこぞの国の王子様のように思わせた。

密かな願いを言うならば……白馬にでも乗って参上してもらいたかった。

……いや、やっぱ訂正。青い瞳をギラギラさせる王子様なんて見たくないよ。アンタは本当に勇者なのかよ、ドウルーダムの奴等今まで疑われてんじゃないか。どこまでも残念勇者だな。

「フィーリイ、大丈夫か」

「……アナタに突き飛ばされたため背中が痛いと吐露します」

「大丈夫だな」

「オイ！」

こなくぞ、なかった事にしようとしてやがる！

「さあ、ドウルーダムの研究員。すべて吐いてもらおうか」

「っ！ …… 我らは“孤高の狼”の僕——情報は一切受け渡しはせん！！」

そう言うや否や。

彼は、その刃を自らに向けて……喉をかつ切った。溢れ出る血を全身に浴びる勇者は——こういつちゃんだけど、真の魔王のよう
で。

……ちよつと、かつこよかった……かも。

ふと思ったアホな感情に気付いたあたしは、それを心で踏みつぶ
した。……アホらし。これだからイケメンってやつはお得だな。

そんな、勇者にたいして悪口とも褒め言葉とも取れる暴言を、心
で吐いてるあたしの目の前で——勇者は右腕で、顔に付いた敵の血
を雑に拭う。

そして一度あたりを見回し……少し離れた馬車を見つけてから、

振り返って言った。

「ベルヴァロスケッド、マリンベール。二人は馬車を」

「うん！」

「はいはい」

「ジュエリー、お前はロックハートを頼む」

「うふつ、愛する人のためなら喜んで」

「プリエステルは、馬車にいる怪我人の手当てを」

「はい、わかりましたわ」

それだけ言い終えると、勇者はあたしに悠々と近付いて来た。……
……つたく、遅すぎでしょ。本当に裏切ってやるうかしら、コイツめ。

片膝をついて、息を切らして恨みがましくしているあたしに……
勇者が手を差し延べた。その、勇者の額から滴り落ちる、血とは違
う透明な滴。……ま、汗だつくだくになりながら走って来たみだい
だし……許してやるか。

差し延べられた手を掴み、あたしは「遅い」と付け加えながら立ち上がる。勇者は不機嫌そうに、眉間に皺を寄せた。

「しょうがないだろ。それでも普通の人間だ」

「あたしも人間ですう。……うへえ、血いついた……最悪」

「お前な……」

「てゆーか、勇者汗臭い」

「……」

「あ、加齢臭？」

「俺はまだ二十二だ」

即答で返される。

あたしはそれを鼻で笑った。

ジツトリとあたしを睨む勇者を無視して、フラフラになりながらもとりあえず馬車へと近付いた。ガル、大丈夫かな……戦う事に集中してたから、なんも見えてなかったんだよね。無事ならいいけど。

途中勇者の肩を借りながらも歩くあたしは、気を失わないよう懸命に歩いた。まだ、眠るわけにはいかない……皆を安否を確かめるまでは。あたしはひたすらそう念じて、歩く。

「オイオイ——馬車倒れてんじゃないか。こりゃ全滅だろー」

「ぶっ飛ばすわよこのゴボウ！ 見てないで、さつさと扉開けなさいっ——！」

「ったく……わかったわかった、君はもう少し慎ましさをだね——うぼわっ！」

ザバーツ、と。

黄金野郎が馬車の扉を開けた途端、何故か水が流れ出した——頭から被った黄金野郎は、ゲホゲホ咳き込みながら手足を地に付いている。

一瞬笑いそうになるのを堪え、あたしは中から“使い魔”の存在を感知する——間違いなく、ガルだ！

そうわかった瞬間、次に流されて来たのは数匹の——いやいや、数人の子供達だった。慌てて子供達に駆け寄るマリンベール。子供達は泣きながら、マリンベールに抱き付いた。

「わあああん！」

「怖かったよお！」

「うつ、ひつく、お姉さんアイツらの仲間じゃないよね？」

「うん、違うよ。さあこっちにおいで、怪我してる子はあるの
お姉さんのほうへ行きなさい」

手慣れた様子で、子供達を先導するマリンベール。やっと正常になつた黄金野郎は今度こそ中に入り込み、中から「おい、手伝え！」と勇者を呼んだ。

……おかしい。なんで自力でガルは出てこないの？ 多分さつき流出した水は、ガルが衝撃から皆を守るためにやったやつに間違いはないだろう。

その問題のガルが、何故すぐに出てこないんだ……？ あたしは不安になり——手をギュッと握り締めた。

「うつ、おい、暴れるなっ！」

「黙れ人間——！　俺に……彼女に触るなっ——！」

「ちいっ！　勇者、ちゃんと押さえる！」

「ああ——！」

——中から聞いた、黄金野郎と勇者……そして、憤るようなギルヴェールさんの声。不安は——当たってしまった。

やがて馬車から出て来た勇者達は、二人がかりでギルヴェールさんを引っ張り——地面へと問答無用で押し倒した。……すごい傷だ。これで生きてるなんて……やはり魔族なだけはあるのか。

冷静さを欠いたギルヴェールさん。先ほどから「離せ人間！」と叫んでいる。なにがあつた？　何故そこまで怒っている？　ガルは——。

——馬車から一向に顔を出さないガルが心配になったあたしは、軋む身体にムチを振り、その中へと入り込んだ。

そこで見たものは……。

……グッタリとしているキュディさんに、泣きながら縋っている

——ガルだった。

「ガル……！」

「お……姉、ちゃ……」

「大丈夫！？ 早くキュディさんの怪我を、プリエステルに治してもらっ——」

そう言いかけたところで……あたしは、ようやく気付いてしまった。一瞬で、血の気が失せる。

……あたしは静かに、キュディさんの口元に手をやり、頬に触れ、首に触れ、手首に触れ——最後の最後に心臓のあたりに触れ、あたしはそれを……確信する。冷たい身体、開かない瞼、空気の振動がない口元、動かない……心臓。

キュディさんは——死んでしまっていた。

「……そんな、ことが」

「うつ……うつうつ……お母さん……！」

「嘘でしょ……目を開けてよ、キュディさん……！」

なんのために、ガルがここまでやってきたのか。……いつか二人を、本当の“お母さん”と“お父さん”と、呼ぶためののに。

残酷、すぎる。

「ガル……」

「さっきまでは……生きてたんだ……生きてたんだよ……！　ちや、ちゃんと……」

「……うん」

「それでっ……ぼく、お母さんって……呼んで……っ」

「っ……うん」

「全部知ってるんだよって……言っただよ……！　わ、笑ってくれて……抱き締めて、くれて……っ」

「……っう、ん」

「なのに……なんで……？　なんでお母さん……動かないの……っ？」

あたしは——ガルを抱き締めて、わんわんと泣いた。小さな身体は今にも壊れそうなくらい、震えていて。……滴る大粒の涙は、枯れる事なく流れ続けている。

その感情があたしにも流れ込み、その信じられない光景に——ただただ現実逃避をしたくなった。

その時、外からは激しい水音が聞える。馬車の外、勇者の「それ以上やったら傷に障る！」というような声が。ハツとするあたしとガルは、一旦キュディさんをそこに横たえたまま——馬車を飛び出した。

馬車から出たあたしが見たもの。それは、先ほどのモンスターよりも大きく作り上げられた、水の化身で……それはとても目の疑うような光景だった。

一瞬、発動している人が……ギルヴェールさんだと、わからなかった。

——ガルが力一杯叫ぶ。

「お父さん！ やめてっ！」

「こっちへ来るんだ、ガル！！ 人間なんか迷惑されるな！」

「ギルヴェールさん！！ お願い……落ち着いてっ！ 話を聞いて！」

「——！ 姫様……」

ギルヴェールさんは間一髪、その化身を勇者にけしかける前に——あたしに気付いた。

「ギルヴェールさん！」

「姫様、俺——私は……今でも、キュディを愛してる………！でも人間が許せない！！！」

「……！ うん、わかるよ」

「ともに——ともに、人間を討ちましょう！ 今度こそ魔族が頂

点に立つべき時！ 人間という腐った人種を、この手で！！」

痛いくらい伝わる——ギルヴェールさんの悲しみ。それは無数の針のように、あたしの心へ突き刺さる。……チクチクと痛いような、挟られているような。そんな、鈍い痛み。

……あたしも、もちろん人間が嫌いだよ。それは今でも変わりないし、キュデイさんを見て心変わりがしそうになった。でも、さつきガルが止めてと言った時……あたしは何を考えているんだと気付いたんだ。

ガルは、父親を止めた。それは人間を殺さないため。……ガルだって憎いはずなのに、それでも今“我慢”をしている。

主人が使い魔の言葉に気付かされた。……今度こそ、あたしは間違えるわけにはいかない。

——不安そうに見つめる勇者に、あたしは苦笑を返す。なんて顔してるんだよ、勇者。勇者は勇者らしく堂々としてなきゃダメでしょうが。

あたしはガルとともにギルヴェールさんへ近付きながら、試すように……問い掛けた。

「人間が、憎い？」

「——憎い」

「人間を、殺したい？」

「——殺したい」

「掟を、果たしたい？」

「——果たしたい」

「子供達も、殺すの？」

「——っそれ、は」

言葉に詰まる、ギルヴェールさん。

一定距離で立ち止まり、あたしは再度問い掛けた。

「子供達も——殺すんでしょ？ 人間なんだから」

「……！でも……子供、達は……」

「——ねえ、一緒に人間を滅ぼそうか？　まずは……その子供を殺さなくっちゃねえ」

あたしは手に魔力を溜める。

「ま——待ってくれ！　姫様……！」

それを、大声で止めたギルヴェールさん。あたしは困り顔で笑って、溜め息を吐いた。……こういう芝居苦手なんだよなあ、勘弁してよ、もう。

その意図に気付いたギルヴェールさんは、たちまち水の化身を打ち消してしまった。力なく、膝をつく。

「ギルヴェールさん」

「……姫様」

「あたしね、ある人に言われたんですよ。……人間という括りで見るとじゃなくて、人間の個人を見ろって。子供達を庇ったギルヴェールさんなら、その意味一番わかるでしょ？」

「……ギルヴェールさんは知ってるはずだ。たとえ人間でも、この子供達はただ純粹で、精一杯生きていて、優しい子達なのだ——個人を知っている。」

「こういう事だよね、勇者？——チラリと勇者を伺えば、彼は優しげにほほ笑み……頷いた。」

それにあたしも、ほほ笑み返す。

「もう馬鹿な事、言わない？」

「……はい。申し訳ありません、姫様……」

「よろしい。……それじゃあ、今度はガルからお説教」

ポンとガルの頭を叩いて、ウインクをした。

「お父さん……」

「……ガル」

「あのね、お父さん。僕夢が叶ったんだよ」

「え……夢？」

「うん。二人をちゃんとお母さんとお父さんって呼ぶ夢」

「……」

「あとね、もう一つ」

不意に、ガルがあたしの手をキュッと握った。

「本当の“お姉ちゃん”のような人の——使い魔になること！」

そう言っつて無邪気に笑うガルは——今日一番、晴れ晴れとした笑顔で……すごく眩しかった。

……ははは、なるほど。“お姉ちゃん”のような主人、ね……
…嬉しい事言ってくれるなあ、もう。少し滲んだ涙を拭きながら、
手のひらにある小さな存在に力を込めた。ああもう、まじ可愛い。

「使い魔——そうか、前に言っつてたもんな」

「うん！」

「そうか——そうなのか。それなら………」

立ち上がるギルヴェールさん。目の前までやって来て、再び片膝をついて頭を下げるその人を呆然と見つめながら……あたしは首を傾げていた。

ギルヴェールさんは、言う。

「親愛なる姫様——いえ、魔王陛下」

「え？ いやいや、あたしは魔王の座を引き継ぐつもりは……」

「いいえ、貴女は私達魔族の生きた証。……陛下、後生の頼みが
ございます」

あたしは、「後生の」という言葉にうつつまらる。それ以上の卑
怯な言葉は、ないんじゃないかな。……でも、あたしはこれから言
われる頼みを断つたりなんかしないよ。

言わなくてもわかる。ガルの事だね？ ……そんなの、言われ
なくたってずっと側で見守るよ。大事な——弟なんだからね。

——勝手に勘違いをしていたあたし。その次に吐き出された言葉
に愕然とすることになるなんて……あたしはこれっぽっちも気付か
ないのだった。

十四

「私、インキュバスのギルヴェール——息子とともに、使い魔として陛下のお側にいさせてくださいませ」

「うんうん、もちろん………は？」

素で聞き返してしまった。

「私はこれでも成人しているインキュバス——お望みとあらば人間の女一人、容易く陥れる事も情報を聞き出すのも可能。……是非とも、お側に」

あまりの事に呆然とするあたしは、数秒ほど——脳内が空中散歩に出かけてしまっていた。

……たとえると、アレだ。隣の近所の人が実は幼い頃に生き別れた兄弟でそれを知らずに互いの子供が結婚してのちに兄弟と知る、みたいな感じの衝撃。え、わかりにくい？

「え、いや、でも、そんな」

「陛下——聞き入れてもらえないでしょうか。孤児院は焼け落ち……最愛の妻を失い……どん底に叩き落とされ……形見の息子は使い魔として生きる事になっていて……ああ、私これからいつたいうしたらいいと言つのでしょう……！」

「ちよっ………それ、泣き落としー！？ コイツめっちゃめっちゃ卑怯だーっ……！」

「くっ………わ、わかりましたよ………」

「そうですかぁ！ それはよかった！ これからずっと一緒だなあ、ガル……！」

「うん！ お父さん！」

くそおー！　なんて晴れ晴れとした笑みで会話してやがる、この親子！！　……　ああ、なんて厄介な事になったんでしょう。グスン。
あたしはガツクリと肩を落して、この切り替えの早すぎる親子を見つめた——でも、まあ、よかったな。父親だけでも生きてたんだから。

そう思ったあたしは、なんとなく苦笑した。

「——よし。それじゃあ、とりあえず宿に一旦戻るか」

勇者の言葉に頷いたあたし達。

「ベルヴァロスクエッドとマリンベールは、子供達の取引先を頼む」

「まっかせてー！」

「うげっ、そんなのこの小娘一人にやらせなよー。僕、子供嫌いなんだよねえ」

「何言ってるのよ、むしろアンタのほうが子供でしょうが。脳内」

「あああん!?　　っただから君は――」

「あーハイハイ。さあ皆こっちおいで、このおじちゃんが怖い人から守ってくれるから、離れないようにしようね!」

「おじちゃん言っな!　お兄さんだ!!」

その光景を見て、みんなケラケラ笑った。あたしもそれを見ながら笑って――。

「フイーリイ!?!」

勇者の、切羽詰まったような声。ばすんと地に倒れる直前、あたしは誰かに受け止められる。……気が抜けて、とうとう限界が来ちゃったみたいだ。

多分ギルヴェールさんが受け止めてくれたのかな？ ごめんなさい、使い魔契約は起きた時って事で。迷惑かけて申し訳ないけれど……あたし、もう寝ます……。

父上のような力強い腕に抱かれながら——あたしはゆっくりと、意識を手放したのだった。

——翌日。

昼時に目を覚ましたあたし。気付けば横には、ベッドにもたれ掛かりながら寝ている勇者がいて……その寝顔にしばらく見惚れていたあたしは、ようやくハッキリしてきた頭で、昨日倒れた事を思い出した。

ガルに心配させちゃったかな。悪い事をしたかも。でも限界ギリギリだったんだし、許してくれるよね。

あたしは起き上がって、勇者の近くで「眼福あざす」と祈りを捧げた。いやあ、朝からいいもん見たわ。こうしてりや普通に勇者に見えるし、なにより美しさが倍増。もう勇者喋らなきゃいいのに。

頭をポリポリ搔いて欠伸をするあたし——いったいあれから何があったんだろう？ 子供達はどうなった？ ギルヴェールさんは？ というか、なんで宿にみんないないんだろう。

……と思ったら、どうやらここは新しく借りた部屋のように、みんながいるのは隣の部屋だという事がわかった。だって、隣からマ

リンベールと黄金野郎の痴話喧嘩が聞こえるもの。毎日大変ね。

バキバキ肩を鳴らし身体の調子確かめてから、少し立ち上がった。うん、良好良好！ 魔力も半分以上回復してるし、視界も体力も絶好調だ。

毛布を引つ掴んでスヤスヤ眠る勇者を伺ってから——それをゆつくり、肩にかけたやる。寝ずに看病でもしてたのか？ ……まさかね。

「……ふっ」

あたしはソロリと音をたてずに歩き、部屋を出た。……隣からはまだ二人の声が響いている。飽きないなあ、あの二人は。

声の響く部屋の前も通り過ぎたあたしは、宿の階段を降り、外へと出た——どうしても行きたい場所があったから。

あたしはそこへ向かって、歩いて行く。

——町から離れ、森の中。来たかったのは、初めてガルと出会っ

たあの場所……湖だ。

湖の前に立ったあたしは、「おい」とその存在に声を掛けた。それは、湖からひよっこりと現れる。そう、水の精霊だ。

あたしはその場に座り、水面から少しだけ顔を出す精霊に、一言お礼だけを言った。

「ありがとうございます」

「……おやおや、魔王様の箱入り娘さんじゃないですか。お倒れになったとかで、心配しておりましたなの。ところで何故お礼を？」

素知らぬ顔をする精霊に、あたしは苦笑した。まったく、精霊ってホントに素直じゃない奴ばっかで困ったなあ。

昨日のことを思い返しながら、あたしはその“お礼の意味”をしつかり答えてやった。

「馬車の中を守ってた水。あれ、最初ガルだと思ったんです。でも違った」

「……」

「だって、馬車の中にいたガルがあんなタイミングよく出来ませんもの。あとから気付いてやっても、怪我は酷くなってたはず」

クスクスと笑うあたし。もう一度しっかり、お礼を言った。

「本当に、ありがとうございました。ガルや、子供達、ギルヴェールさんを助けてくれて」

ちょっと気まずそうに、視線をキョロキョロさせる――水の精霊。

精霊はたしかに、誰かの味方になったりなどしない。でも心がなわけじゃないんだ。彼らだって、誰かを心配する感情がある。

……きっと、ガルがギルヴェールさんによってここに飛ばされた時。助けを求めたガルの言葉に、揺らいでしまったんだろう。

よかったね、ガル。ちゃんと言葉は届いていたみたいだよ。

クスクス笑い続けるあたしに業を煮やしたのか、精霊はちよつとつっけんどんになりながら言い訳を並べた。

「べ、別にそういうことじゃないですなの。ほら、姫に加護を授けてましたからね」

「はは、そうですか」

「……。それに、あの子は……友達ですから」

そう言って、精霊は照れたように咳き込んだ。

「で、ではこれで失礼しますなの。お昼寝のお時間ですからね……姫も一緒に？」

「いえ」

「即答ですか。残念ですなの。……それでは最後に」

——あたしは、立ち上がった。気持ちを込めながら、深々と礼をする。

「水のご加護が姫を——皆を、守りますように」

ちゃぷんと音を立て、湖の奥深くへ潜っていく精霊。……ハハ、相当恥ずかしかったのかな。珍しいものを見たもんだ、あたし。

スツと立ち上がり、一度伸びをした。何も言わずに出ちゃったから、騒ぎになってないといいなあ。怒られる覚悟だけはしたほうが良さそうだ。

湖に背を向けて、あたしは——“仲間”のいる場所へ、笑顔で帰るのでした。

十四（後書き）

第一章的なもの、完です。

次回番外編挟みます。

番外編・悪魔なあの子（前書き）

下ネタ的なもの多め

お気を付けください。

番外編・悪魔な女の子

俺の名前はギルヴェール。姓？ 位の低い魔族に、そんなものはない。まあ……しいていうなら、“インキュバス”かな。

夢魔は成人したら、サキュバスかインキュバス——つまり女か男かを選ぶ事が出来るのだが、それまではぶっちゃけ同性類的なもん。

まあ、どっちかを決めたからと言って、もう二度と変身できないわけじゃない。建て前上はどっちにする？ みたいな感じ。

……俺はそれで、“インキュバス”——男を選んだ。理由は簡単。女が好きだから。

女を見てた方が興奮するし、なんたつて柔らかくて触り心地がいいし……そんな理由で決めた俺なわけだけど。

……今、ひじょくに困っている事がある。それは男として生きる と決めた俺にとっては、かなり深刻な内容。男止めますの勢いでいい かないと、俺は“インキュバス”どころか“サキュバス”にもなれない……そこまで深刻な状態なのである。

その、困っている内容とは。

……何を隠そう、俺の自慢の“イチモツ”——息子ちゃんが、ス
タンドアップしてくれないというのだ！

これも全部……。

「あんの悪魔めー！」

悪魔——のようであだの人間な、一人の女。俺はそいつのせいで
……このような残念インキュバスになってしまった。

ああ神様……いや信じてないけど、とにかく誰か様。どうにかし
てこの自慢のビックマグナムを、機動修正してください！

「——ああもう、なんなんだよあの女！」

……しかし、そんな都合のいい誰か様が現れるはずもなく。俺は最近、こうして部屋でうじうじ悩みまくってるわけなのだが。ああ、ホントに誰か答えを教えてくれないか？

何故、あの女を見ると興奮するのだろうか。

何故、あの女を見ると抱き締めたくなるのだろうか。

何故、あの女を見ると切なくなるのだろうか。

何故、俺は今あの女の事ばかり考えているのだろうか――？

理解不能な自分の気持ちに、今、俺は頭を悩ませている。あの女は何者だ？ 実は凄腕の魔術師とかで、奴は俺に呪いを掛けたのだろうか。それとも俺がイカれたただけか。

……どちらにしても最悪で、考えられない事だった。あの女は魔力の欠片もないし、なにより俺は正常だ。パニックになりすぎて、逆に今は至極冷静になっている。

そう――イカれたわけではないのだ。頭も、大事な大事な……イチモツも。何故わかるのかって？ そんなの簡単だ。

——だって、あの女の淫らな光景を思い浮かべるだけで……簡単に元気になっちゃってくれるんだから、な。

ああ、想像をしだすと止まらない——もしあの女を好きに出来たら、俺はもうすべてを投げ出すことさえ厭わなそうだ。

好きに出来たら、何をしよう？ 縛り付ける？ 舐め回す？ それとも無理矢理やって泣かす？ とにかくめっちゃめっちゃにして壊したい——でもその反面、大きな優しさの塊であの女を包み込み……蕩けさせてみたいとも思う。

壊れやすそうなその身体をゆっくり撫で上げ、柔らかなソレに顔を埋め、じつくりと時間をかけて焦らしていく。そしてしばらくその綺麗な瞳を見つめて、頬を撫で、その桃色に色付くぷるっとした唇を少し乱暴に奪い……舌を入れ混ざりあう。ああ、なんて興奮するんだ。

あの女は、どんな顔をして俺を求めるだろう？ 恥ずかしがりながら柔順に従うだろうか、反抗的な視線を向けて涙を浮かべるのだろうか、淫らになって貪欲に求めるのだろうか——どれをとっても素晴らしい。

熱くなる心を押さえて、俺はその幸せな一時を味わった。優しくしたい、でも泣かせてみたい——そんな矛盾した感情が、俺の心を掻き乱す。

あの女、マジ悪魔。この俺をこんな風にするだなんて……もしかや本当に魔術師なのでは？ それとも、実はサキユバスとか。

いや、いや、落ち着け俺。それはただの願望だ。……願望？ 願望なのか？ なら俺は……それを、望んでいるのか。

……何故だろう？ わからないことだらけで、俺の頭は完全ショート寸前だ。もう、わかんねーよ……俺ってばどうしちゃったんだ。

それもこれも……やっぱりあの女のせいだ！！

俺はその恨みを晴らすため、あの女の元へいく準備をした。何回も鏡を伺っては変なところがないかを探り、服のほこりを見つけては丁寧につまみ、見た目を厳重に確かめる。

……ようし、これであの女も懲りるだろう。って、何に懲りるんだ。まあ、いいか、会えれば。

俺は不安と期待を胸に秘めながら——魔界の家を飛び出した。もちろん向かうは、あの女のいる人間界……！

この時間なら花屋でバイトをしているはずだ——事前調査済みである。下級だからってナメるな、俺は泣く子も惚れるインキュバス様だぜ！！

そうして俺は、人間界へいる“あの女”の元へ……ワクワクドキドキしながら向かうのだった。

——人間界。

俺はとある路地裏で、心を落ち着かせていた。説明しがたいのだが……あの女の店の近くまでできた途端、何故だか動悸が治まらなくなったのだ。しかも息切れまでしてやがる。

さぞかし今の俺は、ハタからみたら「ハアハア」と気色の悪い変態に見えているのだろう。……ま、このインキュバス様の甘いマスクと色気で、お得作用がでてますけどね。その証拠に通りすぎる女達の目が、うつとりと蕩けていた。

「つと……いかにいかに、早くあの女に会いに行かねば……」

俺は、早まる鼓動を無理矢理押さえ付けた。

……ああ、緊張する。なんでこんなに緊張するんだ？　しかもやけに苦しいし。でも——それがいやに、心地いいというか。俺、マゾヒストだったのかな？　むしろ仲間にはサド公爵と呼ばれていたのだが。

くそう、こんなサドとして純真だった俺をこつも惑わし、狂わせるとは——！　あの悪魔め！　今に見てろっ——！！

俺は路地裏から飛び出して、余裕を纏ったかのように優雅に歩き出す。向かうのは、前方に見える敵地——花屋だ。遠目からでもあの女が働いているのが見えて、俺は小さく「うっ」と声を漏らした。

……か、可愛い……！

あたたかで、麗しくも妖艶な顔、はち切れんばかりの丰满な胸、ゆるりと流れるような滑らかな腰、ふっくら弾力のありそうな尻——うわあつ、今はダメよマイポーク！！　こんなところで元気になっちゃあかんですうううっ！

「——あら？　まあ、ギルヴェールさん。また来てくださったんですね」

店の前でわたわたする俺に気付いた、あの女——キュディ・ホンベルト。彼女はふわりとほほ笑みながら、言った。

「ふふ、社会の窓が全開してますよ」

「わああああい！」

俺のばかーん！

鏡を見ていったいナニしてたんだようー！　って、ほこり取ってたりしましたね。くそうつ！

俺は泣きなくなる気持ちを押さえて、なんとか気丈に振る舞うように心掛ける。……ここで負けてはならない、いざ、勝負の時！

「キュディ」

「はい、なんですか？」

「ご趣味はなんですか」

違あああう！

俺、気付け。この女に惑わされるな！　とにかく聞かねばならないのは、こいつの正体だ。いったい俺にどんな呪いをかけているのか……確かめろ！！

俺は自分を叱咤しながら、「趣味ですかあ。菜園ですかね」と答えるキュディの言葉をすっかりインプットしながら、再度問い掛け

る。

「ねえ、今日終わったら時間あ」

「ふふ、ありません」

「スピード回答！ 最後まで聞いて！？」

「あ、このお花どうですか？」

「そ、それよりさ、今日仕事何時に終わるのかな」

「年中無休です」

「すごいね！ でも嘘だよね！」

「ふふ、はい」

「笑顔でとんでもない大嘘だな！！」

くっそー！

見た目だけの超絶DS悪魔めえ！！……でも、負けるわけには
いかないんだ。この正体不明の感情に名を付けるまで、俺は引き下
がるわけには――。

少し冷静になると、俺は深呼吸を繰り返す。熱くなるな、冷静に、優位に立て。今まで俺は数々の女をオトしてきた、百戦錬磨の男だろう？

こんなたかが人間の女一人惚れさせるだなんて、わけない……………。

「——？ ギルヴェールさん、どうかしましたか？ あ、お花の匂いがキツくて気分が悪くなりました？」

心配そうに気遣う、キュデイ。俺はその麗しい顔を硬直したまま見つめ——この感情に、たしかな名前を見つけてしまっていた。

何故、今気付いたんだ。アホすぎる、マジ馬鹿。いくらなんでもここまで来て——やっと気付くなんて。俺、やっぱり…………イカれていたのかも。

そう…………“恋”に浮かされて、イカれていたんだ。

——急激に恥ずかしくなった俺は、顔をカアツと真っ赤にさせる。今、絶対リングオみたいになってるよ。なんて恥ずかしい奴なんだ…………俺は。

キュディは……そんな俺を少し不思議そうにしつつ、その柔らかな手のひらを額にあて、言った。

「ギルヴェールさん、大丈夫ですか？　少しおやすみになられたほうが――」

「……………しました」

「えっ？」

「恋……………しました。貴女に」

――夢魔、ギルヴェール。俺は今まで生きて来た中で、最高最大の恋愛をしている。

それは……………悪魔のようで人間な、一人の女の子。

「――あら、奇遇ですね。私もギルヴェールさんに、恋をしちゃったみたいなんです」

これから先、どんな人生が待ってるのかなんて……俺にはまったくわからない。それでも俺は多分、後悔だけはしないんだと思う。キュデイと出会えたこと——いつしかキュデイと結婚できたら、子供を作って、その子供をいっぱい甘やかしたりして。

……そんな父親に、いつか、なりたいなあ。

悪魔なあの子——番外編。
完。

番外編・悪魔なあの子（後書き）

ギルヴェールとキュディの恋愛の始まりでした。

短くてごめんなさいm（――）m

番外編・あたしの天敵（前書き）

勇者達が来る、フィーリアのちょっと前のお話。

番外編・あたしの天敵

——コチ、コチ、コチ、コチ。規則正しい古時計の音を静かに耳に馴染ませながら、あたしはその他の音が聞こえないかと慎重に慎重を重ね……コクリと唾を飲み込んだ。

魔王城のとある使われていない一室。普段は物置部屋になっているそこで、あたしはどこぞのスパイかと問われそうな服装に身を包み——今こうして、コソコソ身を潜めていた。

何故、魔王の娘であろう者がそんな事をしているのかって？ もちろん、決っている。……鬼のように迫り来る“アレ”から逃げるため、だ。

「ひーめーさーまー！ 今日こそ逃がしませんぞおー！」

……わりかし近くで聞いた声。これは、大臣だ。

「魔王陛下が何度も“人間界へ行くな”と行っているにも関わらず——！ 本当にもう今日は、容赦致しませぬ——！」

あたしは迫り来る大臣の気配をしつかり感じ取り——ついにて怒気も感じ取り、必死に自分の気配を押し隠した。

……そう、今あたしが追いかけて回されている理由は、それだ。人間界に済む憧れの大海賊の情報を集めようと思って、度々お忍びで人間界へあたしは向かっていった。帰って来るたんびにバレているので、不思議には思っていたのだが……なるほど、行く時点でバレていたのか。あたしは悔し涙を少し流す。

しかし、泣いてはいられまい。今日はこの口うるさい大臣に加え——その息子である、嫌味たつぷりの縦長男まであたしを追いかけ回しているのだから。父上の専属執事、ベイクドールだ。アイツだけはなるべく接触を免れたい。大臣だけなら逃げる自信はあるのだが。

あたしは段々怒りだす大臣の声色を聞き取りながらも、奴の気配を必死に探る——奴は神出鬼没なのだ。油断していたら、簡単に後ろを取られてしまう。

「——見つけましたよ、姫様。さあ、魔王陛下にこっそり搾られてもらいましょうか……もちろん、私の説教のあとですけどが」

……こんな風に、ね。

あたしは、悲痛な叫びをあげるのだった。

——執務室。

父上は書類に目を通しながら、ドンマイとでも言いたげにこちらを見ている。そんな中……あたしは鬼親子に説教を食らっていた。

ていうかどうしてあの部屋から現れたの！？ マジこいつあり得ない。化物以外の何者でもないというか……ホントいつも思っていたのだが、いったいどうやってあたしを見つけているのだろう。不思議すぎる。

あたしは説教を聞き流しながら、ひたすらそんなことをぼんやり考えていた。しかしそれを見逃す父親ほど、奴は甘くなかったのである。

「姫様、もちろん今の話を聞いておられましたよね？」

「……え!？」

「まさかとは思いますが、ご自分に負があり説教をされていたのにも関わらず、それを聞いていなかった……なんて。有り得ませんものね?」

さあ、どうしてやろうかこの小娘。……そんな視線がバシバシ伝わり、あたしは冷や汗をただ漏れさせていた。うわああん! 助けて父上!!

「こうなったら……」

「ひっ! ……」っ、こうなったら?」

「……二度と人間界などに行かれぬような、“ちよつとした”罰を与えなければなりませんね。さ、行きましょつか」

「にゃーん!! ちちちち父上ええっ!!」

首根っこを掴まれてズルズル引っ張られていくあたしを、父上は

ハンカチで涙を拭いながら見送る。今生の別れか！ そうなのか！
？ いやあああせめて罰は大臣の考えたものにして！ ベイクド―
ルのだけは絶対嫌だよおおお！！

――と、叫びは虚しいもので。引きずられながら何処かへ向かう
中、連れ去られるあたしを見てか……通り過ぎるメイドや兵士達は
顔面蒼白になっていた。誰か、「とうとう姫様までもがアレを……」
と言っていた。

アレってなんですかあああああ！？

「ええい、一々動かないでください小賢しい！」

「おつまえあたしのこと姫様とか言うわりには口汚いな！！」

「ハッ、いくら魔王の娘とはいえ餓鬼は餓鬼。たった十年そこら
しか生きてないシヨンベン臭いお子様に、何故この私がそこまで丁
寧に話さねばならないと？」

「ピチピチの少女捕まえてシヨンベン臭いだとおー！？」

「まったく先が思いやられる。姫様は姫様らしく慎ましくあるべ
きです。……ハンッ、無理か」

「フシャー！！」

むうかあつうくううううう！ マジでこいつあたしを姫様と本気で思っ
てないだろ！ いや、いいんだ、いいんだけどね別に。それはあたしも思
っているのだし。……でも他人から言われるとムカつく！ そしてベイク
ドールに言われると余計にね！！ くそう、いつかコイツに「ぎやふん」
と言わせてやりたい。今どき「ぎやふん」だなんて言う人はいないと思
うけど。

あたしはひたすらベイクドールを睨みながら、ブツブツ文句を呟く。
もちろん聞こえないようにだったのだが、あたしはそれでもコイツの地獄
耳を理解していなかったのか……。結局、自分が「ぎやふん」と言う事
になってしまった。

「さ、姫様？ これから楽しい罰を受けてもらいましょうか。
“ぎやふん”と言いたくなるような……ね」

「ぎやふん！」

「素晴らしい返しをありがとうございます。では、さっそくこの部屋に
入っていただきましょうか」

お約束のごとく、ボケを入れたあたしを華麗にスルーしてくれるベイク
ドール。ちよつと涙が出たけれど、今から泣いていたらこれ

からがもたない。なぜなら、これからもつと酷いことが起きるはずなのだから……。この男が考えた罰、並大抵のものではないはず。想像するだけでも恐ろしい。あたしは気を引き締めながら、なおかつ首を掴まれた猫のようなまま――目の前の部屋に入ってしまった。

……その、部屋には。

ぎゃふんを通り越す、声にもならない驚きの悲鳴をあげるような――“アレ”がいた。アレって？ いや、これだけの比喩で絶対みんなわかるはず。そりゃ男女問わず嫌がるはずだよね……。あたしもさすがに、台所の嫌われ者と仲良くするなんて……できないもの。

――カサカサ動く黒光りのそれを視界にとらえた瞬間、しばらく思考がショートしたあたし。しかし、やはりそれも長くは続かない。だって“アレ”が近づいてきたんだもの。

あたしは一気に覚醒をして、モンスターも顔が真っ青になるような叫び声をあげた。そして嫌味とばかりにベイクドールが持ち上げていたあたしを下におろすので、すぐさまよじ登った。もちろん、縦長なベイクドール様に。背中にピッタリくつつくさまは、さながらセミのように見えただろう。しかし今のあたしに、そんな恥は皆無なのである。冷静にGを見つめるベイクドールにも多少恐ろしさはあるが、今では少し頼もしい存在だ。

こやつをもし今離してしまったら、あたしは多分気絶してしまう。……. なんとかしてでも、張り付いていなければ。

「姫様、これでは罰になりません。降りてください、じんわり重

いです」

「嫌だアア！ ていうか罰ってこれなの！？ ま、まさかとは思
うけど……！」

「最初、退治をお願いしようとは思いましたが……私もそこまで
鬼ではありませんからね。一時間ここに一人で我慢してもらいまし
よう」

「どっちにしろ無理ですううう！」

こうなれば、と。あたしは絶対にベイクドールから離れまい……
と言わんばかりに、すっかりひつついていた。どれだけ振り回され
ようが、この手を離してなるものか。離したら最後、あたしの足か
らじわじわと……この生きる化石があたしに迫り来るのだろう。そ
れだけはなにがなんでも嫌だ！！

そんな強いあたしの意味が……掴まれている全身に伝わったのか、
ベイクドールは諦めたように嘆息する。たしかに、鬼とはいえコイ
ツも甘いところがある。大抵の泣き落としには応じてくれるのである。
大抵のは、ね。それも本気で嫌がってなきゃダメなんだけど。

しかし今回は、わかってくれたようだ。ベイクドールは「仕方な
い」と呟いて、あたしを背に抱えたままその地獄の部屋から遠ざか
ってくれた。……あれ、なんで目から鼻水が出ているのかな、あた
し。

「——まったく。これでは罰にならないじゃないですか」

「いえ充分罰になりました」

「どうしようかね……他になにかあればいいのですけれど」

「だからもういいってば！」

と、どれだけあたしが説得しようとも、簡単に聞き入れるわけがなく。そんな最初からすぐ諦めるような性格ならば……コイツはここまで捻くれた人物になってはいないだろう。だから“鬼”と呼ばれているのである。あたしは今まさにそれを痛感し、しがみつく腕に力を込めていた。あ、なんでまだしがみついているのかって？ はは、腰抜けちゃって。腕にしか力が入らないの。その証拠に足はベイクドールが掴んでくれていて、最早おんぶのような形になっていた。

そんな時、不意にベイクドールが呟きだす。

「——ん？ ……ちっ、困りましたね」

「え、ネタ切れ？ 珍しい……あの“人の心を抉る天才”ベイクドールが、オシオキ法を思いつかなくなるなんて。うーん、それともボケた？ ていうかベイクドールって何歳？」

「年齢は言いたくありません。しかしボケてもいません。本気であの部屋に閉じ込められたいんですか姫様」

「申し訳ございませんでした」

取り返しがつかなくなる前に、あたしは素直に謝った。

だって怖いんだものこの人！ ベイクドールが一度決めたことを諦めるなんて、普通ありえないんだから！ だからさっきのは奇跡とも言えるんだ。その奇跡を無駄にはいけない。

あたしは取り付くような笑顔を浮かべて——まあおんぶされているので顔は伺えないが、それでも表面上気のいいフリをしつつ……あたしは「何が困ったの？」と問いかけた。ずっと目の前を真っ直ぐ見つめているのでなんだろうとは思ったのだが、あたしの肉眼ではなにも見えなかった。肉眼で見えないだけで、この先にはもしかしたら何かがあるのだろうとは思うけど……とにかくあたしは聞くしか方法がなかった。

ベイクドールは少し言葉に詰まったのち、「何でもありませんよ」とこぼす。

「えー！ 何もないこたあないでしょ！」

「ったく、背中に張り付いたまま叫ばないでください。落としますよ」

「姫様は大事に扱ってくださいー」

「ああもつ、一々やかましい姫様だ。……姫様が気になさるような問題ではございません、わかりましたら少し大人しくしていただきますか？ 腰抜け姫様」

くっ……！

否定ができないだけに、ものすごく悔しい！！……まあ、ベイクドールが「問題ではございません」というのなら——あたしはそれを一応信じるけれど。ベイクドールだけじゃない、大臣や先ほどあったメイド、兵士……この城にいる者達は皆、“魔王とその娘を守る”、それが使命として生きているようなものだ。

すなわち、命も投げ出す覚悟が出来ている……この城にはそんな者の集まりだから、あたしは嫌なのである。あたしだって、守る側にいたいから。この城のみんなを、あたしだって守りたいんだ。……そんな事言っても、どうせベイクドールに鼻で笑われるだけなんだろうけど。それでもあたしだって、命を捨てる覚悟はある。みんなを、守るために。

……しばらく無言になったまま、あたしはベイクドールにおんぶされたまま、長い廊下を歩いていった。ベイクドールも気付いているのかな？ あたしがそういう風に魔族のみんなを思っているって……。だから、意地でもそんな事させないようにしているのだろうか。いや、嬉しいんだけどね。

はーあ、寂しいよなあ。仲間ハズレみたいじゃん？ そりゃあたしはぶっちゃけ人間なのだけれど、でも、心は魔族なんだから……。あーもう！ だから姫様扱いは嫌いなんだよ！

我慢が効かなくなったあたしは、もう素直に文句を垂れ流ししていた。「だいたい、あたしだって魔法は父上より強いんだから！」とか、「運動神経だって悪くないし！ つーか身体動かしたい！」とか。ベイクドールはそれを、静かに聞いて……。というか、スルーしている。それでも、あたしは続ける。

「みんなあたしを姫様姫様って！ 姫様が戦っちゃいけないなんて誰が言ったのさ！！」

「……」

「あたしだって父上を守りたいし、何より魔族の意思を継いでるんだから、少しくらいお手伝いさせてくれたって！！ 頭力チカチすぎなんだよ！」

「……」

「もー！ 父上のアホ！ 大臣の間抜け！ ベイクドールの史上最強性悪クソオヤジ！！」

「ちよつと待ってください、なんで私の悪口だけそんなに長いんですか」

……バレたか。

このノリで言いたいこと言いまくれると思っただけど。そううまくは事が運びそうにないな……さすがベイクドール。聞き流しているように見せかけて、なかなかやるじゃないか！ ……なんてふざけるものだから、結局あたしは問答無用で落とされてしまったのだけれども。

落とされたせいで痛む尻を撫でながら、あたしはムスツとしながらベイクドールを見上げた。ベイクドールは仁王立ちをしながらも、どこか読めない表情を浮かべて……ポツリと言った。

「貴女は、魔王様の娘様です」

「でもあたしは——」

「人間です。この城の者、全員が知っております」

読めない表情のまま、ベイクドールは言葉を続ける。

「そして、人間である上に、私達“魔族”にとって……大事なお姫様なのです」

「……」

「魔王様は貴女様を娘のように思い、我が父である大臣は貴女様を孫のように思い、私も——姫様を、妹のようにお慕いしております。そんな方に、危ない事をさせるとお思いですか？ もしそう思うのであれば、姫様にはもう一度……一般的な知識から勉強してもらわねばなりませんね」

……感動的瞬间なのに、感動できないのは何故だろう……。

「……姫様」

「……」

「貴女様は、我々“魔族”の……生きる希望なのです。これから
の世界……姫様には、変えていってもらわねばなりません」

「父上に任せればいいーじゃん。どうせあたしは何もできませんよ
ーだ」

「ほんと、幼い頃から見てまいりましたが……ずいぶん口ごたえ
が達者になりましたね。誰に似たのやら」

そう言つてクスクス笑うベイクドールに、あたしはふんつと顔を
背けた。あたしの口が汚いと言うならば、それは間違いなくベイク
ドールの影響であろう。うん、間違いなく。

あたしは立ち上がりながら、溜め息を吐いた。……知ってる。み
んなもあたしを大切にしてくれているというのは。だって、だから
あたしも、みんなを大切に思えたのだから。そうでなきゃ、あたし
は魔族のみんなを好きになつていなかっただろう……。一番
好きなのは、もちろん父上だけ——あたしはみんな、大好きだ。
魔族のみんなが。

見上げるほどデカイベイクドールを見つめながら、あたしは始終
黙り込んでいた。見つめるというより……睨む、だけれど。しかし
ベイクドールがそんなことで怯むはずもなく、「ふ」と笑つては……
あたしの頭を撫でだした。あたしは目を点にする。

「まったく、特別ですよ？——実は先ほど、我が父から連絡が入ったのです」

「……え？」

「どうやら勇者がこの城に到着したとの事で」

「！？　そ、そんな……！！」

「ですが、これは姫様に関係ない事なのです。……いいですか姫様」

ベイクドールは、あたしの頭から……額に手をずらした。

「我々は——いえ、私は。必ずや魔王様、そして姫様を……フィリアを守ってみせる。それが私の生きがいで、心に誓ったことだから。私の可愛い妹、これからも……くだらない人生を歩み、幸せに生きてくれ。私はそのために、今から犠牲となつてこよう」

「まっ——！！」

「……おやすみ」

……そして、あたしは。

ベイクドールの放つ魔法によって眠りに落ち、気付いたときには部屋にいた。あちこちから乱闘の音が絶えまなく続き、確認しようとしても部屋から出られず……。やっと出られた時には、城にいる魔族が“父上”だけとなっていて。

ベイクドールが言っていた、犠牲という言葉。……その言葉の意味が、あたしが考えているものと同じならば……。多分もう、ベイクドールは生きてはいないのだろう。勇者にトドメを刺されそうになっている父上に駆け寄りながら、あたしは心で謝った。

こんな妹でごめん……。と。

「父上から離れるおおおおおー!!」

ねえ、ベイクドール。

あたしね、言いたいことがいっぱいあるの。あるのにね、出てこないの。ちゃんと目を見て言いたかったことや、恥ずかしくて言えないようなことまで、いっぱいあったはずなの。……なのに、なんでかな？ 今ね……。何故か胸が詰まって、言葉が見つからないんだ。

……でも、もし生きててくれるならば。あたし、どんなことでも言うからさ。うん、まずは……そうだなあ。

ベイクドール。

……あたしを、妹にしてください。

あたしの天敵——番外編。
完。

番外編・あたしの天敵（後書き）

妹思いな意地悪大好きお兄ちゃん、ベイクドールでした。

天敵はベイクドールとものとれますし、勇者とものとれますね。

次回から第二章始めます（ゝ・ω・ゝ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3251z/>

魔王な義父と勇者なアイツ

2011年12月19日21時45分発行